
女は強く、世を渡る

K R

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

女は強く、世を渡る

【Nコード】

N2307A

【作者名】

KR

【あらすじ】

全てに恵まれたお嬢様、エマ。そんな彼女に、突然降りかかった恐るべき試練とは？血と恐怖に埋め尽くされた先の見えない未来に、エマは自慢の魔術で突き進む。

エマはお嬢様？

剣と魔術による戦いの世界。

盗賊と魔物がうごめく巨大な大陸。

生き難い世の中では、誰もが強さを求められる。

そんな舞台で舞い踊る、儂い女性の物語。

元気の良い太陽に見下ろされながら、馬車にゆられること丸三日、
ようやく目的の村が見えてきた。

「父様！ 母様！ 櫓やぐらが見えます！ 収穫祭に間に合ったみたいで
すよ！ やったー！！」

「エマ、身を乗り出すのはやめなさい。あなたはもう結婚にいく歳
なのですよ」

うつつ、そんなこと分かっているのに、母様はひどい。

今回が私にとって、最後のお祭り参加になるかもしれないって
うのに、こんなときまで結婚のことを言わなくても。

「もう！ 分かっていますよ、母様。お祭りで踊るのは今回で最後。
結婚してからはワガママ言って、父様の地方視察へついて来たりし
ません」

私が、副領主である父様の娘として生まれてから、エマという名
で呼ばれ続けて今年で十七年目。ちよつとばかり裕福であることを
利用して、大陸中のお祭りに飛び入りしていた事も、今回で最後を
迎えてしまった。

今年のはじめ、前領主の不正を暴いた父様は、国王様に功績をた

たえられ、領主に任命された。私にとって父様が偉くなってくれるのはありがたい事だと思っていたのだけど。

「はあ、貴族の息子と結婚が決まっていたなんて、サギだよ」

古い歴史と莫大な財を持つ地方貴族たち。仲良くなれば力強い味方になるけれど、反対の場合は悲惨な思いをすることになる。

領主となった父様が、領地の平和を維持するために、貴族の力を借りる事は当然といえば当然の行動である。

「だけどなあ」

大陸中で起こっている小さな戦争は、私も認識しているし、傭兵や術士によつて、多くの領民が土の下に埋まることになっている現実も、良くわかつている。

「だけど……、私は領主の娘として、役目をはたすことに抵抗を感じてしまっているの。」

「そんなに悲しい顔をしないでくれよ、エマ。結婚の事が気になっているなら、日程を変更してもらえるよう頼んでみるよ。来年にしてみらおうか？」

「あなた！ そんなこと言つて前回は伸ばしてもらったのでしょ？ 今回ばかりはダメですよ」

「もー、二人ともケンカしないでよ！ 今度は絶対逃げないからさ」

父様は剣士としても一流なのに、どうしてこんなに優しいのかしら？ 知らない人が見たら、母様の方が強そうに見えちゃうだろうな。

私を含めた親子三人が乗る馬車は、護衛の騎士たちにかこまれな

がら、にぎやかな会話を運んで視察地の村へ入っていった。

村の様子は去年と変わりなく、質素な建物が立ち並ぶ。目を引く大きな建物と言えば、村長の家と教会ぐらいで、背の低い家屋が密集する背後には、広大な農耕地が広がっていた。

変わったのは私だけだね。気ままな身分だった私が、いまや領主の娘。誰とでも普通に遊んでいた去年が懐かしいな。

自分の周りにはいつも護衛の兵士。時間があれば、国から派遣された偉い人達との会談、会食。大好きな祭りにも参加が難しくなつて、ついには見知らぬ人との結婚。

父様に無理を言つてついでにきた今回が、私にとって最後の祭りになることは間違いない。だけど、結婚を受け入れられない私の曇つた心で、みんなに喜んでもらえる踊りができるのかな？

ああ、憂うつ。

「エマ、ため息なんかついていないで、降りなさい。もう到着しているわよ」

「あれ？ はい、母様。いま行きまーす」

いじっていた自分の黒髪から、視線を外へ移すと、ちょうど目の前に、村一番大きな村長さんの家がそびえたっていた。

村長さんの家へお世話になるのは四回目。だけど今までとちょっと違うのは、護衛の人数だった。

父様が副領主だったころは、五人ぐらいの兵隊さんがついて来ていたけど、今日はなんと十五人。それも騎士階級の実力者が五人も含まれている。

私が馬車から降り、周囲をかこんでいる人たちを見て思うことは、領主っていう役職の重要性和、村長さんの家に十数人も人が泊まれるのだろうか、ということだった。

「ちょっと多人数だよ。大丈夫なのかな？」
「大丈夫ですよ、エマお嬢様。今年も来て頂いてありがとうございます。お部屋はしっかりと確保してありますよ」

すっかり顔なじみになった村長さんは、一段と白いヒゲが伸び、やせたように思えた。背が私より高いから、よけいに細く見えてしまう。

色々と苦労があるんだろうな。私が来たことで、迷惑がかからなければいいのだけだ。

「こんにちは、村長さん。明日の収穫祭、楽しませてもらいます」
「はい。こちらこそ、お嬢様の舞台を楽しみにしております。村の者達も同じ気持ちですよ」

小さな農村での祭りというのは、実際のところ派手なものではない事が多い。私が四年前にこの村へ飛び入りした時も、踊りと奉納儀式が中心になっている地味なものであった。

それがいまや、私の舞いを組み入れて、村全体が大騒ぎする大規模な収穫祭になってしまっている。来年から参加できなくなる私としては、ちょっとやりすぎたかなと後悔きみ。

はあ、みんなになんて言えばいいのよー！

「エマ、どうしたの？ 着替えて皆さんに挨拶してくるんですよ。考え込んでいないで、中へ入りなさい」

「うん。このままでいいや。父様、母様、ちょっと行ってきますー！」

私は、重量のある外出用のドレスを持ち上げて走りだした。母様の言う通り、服を替えるつもりだったけど、なんだか面倒になっ

やった。

「こら、待ちなさい！ シエノ、ラマ！ 追いかけてちょうだい！」
「お任せください、奥様」
「まったく、困ったお嬢さんだ」

よけいなお世話だつていうの！

ラマはシエノと違って口が悪いんだから、昔から我が家の護衛として勤めているからって調子にのつてない？ 本当に父様よりえらそうなんだもんね。母様も当たり前前みたいに二人を指名するのやめてくれないかしら？

「ラマ！ 嫌なら母様のところへ戻ったら？ シエノがいれば十分よ」

父様達から離れ、村のみんなが作業している寄り合い広場へ向かう途中、私は後ろで大きなあくびをしているラマへ、嫌味をぶつけていた。

「そうはいきませんよ。尻のかるいお嬢様でも、雇い主の一人ではありますからね」

「この！ そこまでいうか！！」

口の悪さは天下一品のラマ。ふりむきざまに放った裏拳もかわされて、憎たらしくてたまらない。

もぉ〜！ 茶色のクセ毛と同じように、性格もクセだらけなんだから！

「シエノ、なんとか言っつてよ！ こいつつてば、ちょっとばかり剣が使えるからって調子にのりすぎよー！」

「まあまあ、いつものことじゃないですか。怒るとききれいな顔がだ
いなしですよ」

うん。シエノはいつも笑顔でお世辞をいうんだから、ちょっと
本気にしちゃうな。

だけど、女みたいな顔のシエノに言われても、あんまり嬉しくな
いぞ。私より背が低くて、肩まで伸びる金髪、ホントにラマと同じ
二十五歳の男性なの？

「ふん！ シエノが甘やかすからいけないのよ。ちょっとは怒りな
さい！」

「あははは、今度からそうしますね」

笑って誤魔化したな。まあいつか、ラマの性格は、死んでもな
おりそうにないもんね。

「エーマちゃん、寄り合い所が見えてきたぜ。さつさと行って、挨
拶でもなんでも済ませてくれよな。俺、腹へってんだよ」

「いつペン死んでこーい！！」

ラマの礼儀しらずな発言にすばやく反応した私は、振り向きざま、
髪にさしていた蝶の銀飾りを投げつけた。

「ぶへー！！」

「へっへーん！ 今度も殴りかかると思っていたのなら、大間違い
よ！ あんたみたいな筋肉バカに、肉弾戦なんか挑むわけないでし
よ。ざまあみなさい！」

私が投げた髪飾りは、みごとにラマの顔面をとらえていた。

意外な攻撃をつけて鼻をおさえるラマに対し、私はとても気分が

よく、草花が支配する地面の上を仁王立ちである。

「シエノ見た?! 狙いどおりよ! すごいでしょう。えっへん!」
「あの、エマお嬢様。え、もう少しまわりを気にかけたほうが宜しいのではないのでしょうか?」

なんのこと? シエノったら、なにを言いにくそうにしているのかしら? まわりがなんだっていうの?

私は、シエノが指をさす方向へ視線をうつし、絶句した。

「エマ様。お待ちしていました」

「エマおねえちゃん! いまのカッコ良かったよ!」

「お父様が領主になられたということで、おめでとうございます」

「エマ様の踊りを拝見するために、隣り村からやってきました。お会いできて光栄です」

ふりむいた私の前には、何十人という村人が集まっており、いっせいに話しかけてきていた。

いつのまに集まっていたのかしら? というより、わたしが道のど真ん中で偉そうに胸をはっていたのを、見ていたって事なの? う、ん、どうしよう。

「おほほ、みなさんお久しぶりです。今回も、御一緒に楽しませていただきますね。うふ」

精一杯、上品な笑顔を心がけたつもりだったが、村のみんなが一步引いたのはなぜだろう? 慣れないことはするもんじやないってことかな? まったく、こんなことで貴族の奥さんになれるのかなあ? ああ、憂うつ。

「いやあ、お嬢さまはお強い。護衛の方を一撃で倒されたとか。わたしもその場で、拜見させてもらいたいものでしたな。いやいや、さんねん」

村長さんの家でいただく夕食の席では、私のことばかり話題にのぼっていた。

昼間のことはみんなに口止めしたはずなのに、いったい誰が村長さんに話したのかしら？ むう、気になる。

「あの、村長さん。私が護衛の人を倒すなんて、その様なことから聞かれたのですか？」

「いやいや、年頃のお嬢様に対して、強いとは失礼しました。気がききませんで、申しわけありません。実際に倒された護衛の方が、凄まじい強さだったと言っておられたので、つい口がすべりました」

おいおい！ ラマの奴、なにを言いふらしているのよ！ 陰険な奴なんだから、あとで逆襲してやる！

すずしい表情でスープを口へ運ぶ私は、笑いをこらえる父様を一瞬だけ睨みつけたあと、反撃の計画をたてはじめた。

みてなさい！ 偉そうな鼻、へし折ってやるんだから！

護衛は幼馴染

「エマ、力を入れて食事するのは止めなさい。それでは、結婚相手もびっくりしてしまいますよ」

「もう、母様だったら！ いまは結婚の事なんか」

「お、聞いておりますよ。お嬢様が結婚なさるとか。いやいや、お相手は国王様とも親密な関係をもつ大貴族だとか。これはすばらしいですね」

「村長。娘の相手は、貴族本人ではなく息子の方ですよ」

「いやいや、これは失礼。つい興奮してしまいました」

うう、父様まで加わって盛り上がりながらもいいじゃない！ 結婚、結婚って、そんなに私を貴族へ差し出したいの？！ 私にとつては相手の身分なんか関係ない！

「ごちそうさま！ 父様、母様、村長さん、お先に失礼します」

「エマ、部屋へ戻るの？」

「いえ、母様。ちよつと外を散歩してきます」

「だったら」

「護衛はいりません。村の中なんだから、大丈夫ですよ。それじゃー、いつてきまーす！」

食事を終えた私は、母様がいつもの二人を呼び出すまえに、姿を消した。

大体、いま出てこられたら、逆襲できなくなっちゃう。気付かないように探し出して、イタズラしてやるんだもんね！

食堂を抜け出てきた私が外へ飛び出したのは、ちょうど夕日が沈む瞬間であった。いままで地上に住むものすべてを暖かく包んでい

た夕日は、暖炉の炎が消えるときのようになり、私の目の前から一瞬にして姿をかくす。

私は、夕日の残り火が天空の一部を焦がし終えるのを見届け、本来の目的へ動き出した。

「さーて、ラマの奴、どこにいるのかな？」

私は目と耳を最大限に活用し、村長さんの家を探索しはじめた。まあ、ラマはうるさいからすぐ見つかると思う。もっとも寝てなければの話しだけ。

冒険者のごとく姿を隠しながら探索をはじめて十数分後、私は裏門近くで聞き覚えのある二人の声をとらえた。うまい具合に、私が接近していることは、まったく感づかれていないみたい。

「うふふ。覚悟しなさいよ」

小声でつぶやく私は、目的の人物へさらに近づいていき、顔と声がじゅつぶん判別できる場所の確保を行う。

聞き覚えのある声は、やっぱりラマとシエノの二人。だけど、深刻そう話し声がかきにかかる。めずらしい事もあるものね。いったいなにを話しているのかな？

「ラマ、本当にこのままでいいのか？ もう、残された時間はわずかなんだぞ」

「しかたない。いまさら何ができる？ 俺はただの護衛兵士。領主様に拾ってもらった戦災孤児が、口を出せることじゃない」

ふーん、ラマは戦災孤児だったんだ。なんとなく気付いていたけど、聞けることではないもんね。

「本当か？ お嬢様が結婚してしまえば、一生会えなくなるんだぞ。」

「ラマ、それでいいのか？ 自分の気持ちを伝えなくていいのか？」
「うるさいぞ、シエノ。お前はどうかんだ？ エマ様が幼いころから、狂おしいほど愛し続けているくせに！」

え？ ええー！！ わ、わ、わたしをなんだってー？ 「冗談じゃないの？ ラマとシエノがー？！ もう十年以上一緒にいるのに、裸で水浴びにいったこともあるのに、どういうこと？」

「ラマ。私は、自分の心をエマさまへ伝えることはしない」
「そらみる！ 人のことをどうこう言える立場か？」

「最後まで聞け。私の考えは、お前とは違う。気持ちこそ伝えはしないが、我が身をささげる人は、やはりエマ様しかいない。だから私は騎士資格を得ることに決めた」

ん？ 騎士資格？ シエノはなにを言っているの？ いつものシエノじゃないみたい。ちょっと怖いよ。

「騎士資格だと？」

「そうだ。後ろ盾のない私が騎士資格を得る唯一の道は、剣術の力量だけを求められる下級騎士の資格のみ。今回、私達と共に護衛の任についている騎士達と同じだ」

「それでどうする？ 金で雇われる騎士になって、何が変わる？」
「簡単なことだよ、ラマ。一介の兵士だったら見向きもされないが、騎士資格があれば貴族も雇ってくれるだろう。まっ、どこの貴族に狙いをつけているのかまでは、言うまでもないと思うけどね」

そんな！ シエノって本気なの？ 私のため？ 私のためだけに慣れ親しんだ父様のもとを離れるつもりなの？

背中を太い幹に押しつけて姿をかくす私は、出ていきたい気持ちを抑えながら、幼馴染の二人がぶつけあっている、本音の会話へ耳

を傾けていた。

「シエノ！ 領主様を裏切るのか？！ 俺同様、拾ってもらった立場のお前が、恩を忘れたのか？！」

「声大きいぞ。お嬢様に聞かれたらどうする」

う！ 見つかってない、よね。シエノは勘が鋭いから注意しないと。

「ラム、私は領主様への恩を忘れたことはない。屋敷を出ることに關しても、領主様へすべて話すつもりでいる。お許しが貰えるかどうか分からんが、どっちにしるお前と共にエマ様を護衛するのは、今回で最後というわけだ」

「ふん。なぜ今頃になって、俺に話す？ なぜだ？」

完全に日が落ちてしばらく、異なる想いを秘めた私達は、深い闇に包まれていた。

屋敷から洩れるわずかな明かりを頼りに、前方を見つめる私の前では、二人の青年が静かに睨み合っている。

昔から仲良く遊んでいた兄のような二人が、自分の前で感情をぶつけ合うことは、悲しいことではあったけど、口論の原因が私自身であることに、私の頬はちょっとだけ紅くなっていた。

「なぜだと？ 分からないのか？ 私は宣戦布告をしているんだ。

ラム、お前には負けない。エマ様をお護りするのは、この私だ」

言うべき事はすべて話したとばかりに、シエノはその場にいたすべての者へ背を向けて、屋敷の中へ姿を消した。残されたままですなだれるラム、激しい感情を露出させたシエノ。

私はいつもと違う幼馴染の姿に戸惑いを隠せず、木々の影に身を

ひそめて、頭が混乱から覚めるのを待った。

「どうしよう？」

シエノに続いてラマも立ち去り、木々と屋敷の明かりだけが辺りを支配する中、私は自分の髪をいじりながら、なにげなくつぶやいていた。

どうせ結婚するなら、シエノかラマのほうが良いのだけどなく。つてこんなこと言つと、母様は怒るだろうな。でも、顔も知らない人と結婚するほうがおかしいよ。

うーん、明日はどんな顔で二人にあえばいいのだろうか。困ったな。

お尻に根が張ったようにその場から動けない私は、屋敷の中であわただしく駆けまわるお手伝いさん達を眺めていた。たぶん、私を探すように言われているのだろう。

迷惑をかけるのも嫌だから、部屋へ戻ろうかな？ 私って、結局なにしに出てきたんだろう？

ひととき強烈な輝きをはなつ一番星へ視線を送る私は、ちょっとした疑問を持ちながら、お尻についた土埃をはらって自分の部屋へ向け歩き出すのであった。

収穫祭当日の朝は、少しばかり雲の多い空模様。

祭りの進行自体に影響がでない天候だということは、私にだってわかるけど、自分の心中をそのまま映し出した自然のイジワルに、なんだか気分が盛り下がっちゃっ。

「こんなことで踊れるのかな？ あゝ、ねむ〜」

寢床に入ってから考えることが多く、とても熟睡はできなかった。結婚のこと、ラマとシエノのこと、お祭りのこと。

私は昨日の会話を聞くまで、シエノ達を男性として意識することはなかった。小さい頃から一緒だったし、両親からも兄妹のように扱われ、私自身、多くの悩みを相談していた。

「そ〜いえば、胸のふくらみについて相談したのも、母様じゃなくシエノだったもんな〜」

窓ガラスにうつつたボサボサ頭の女性を、半開きの眼でみつめる私は、男性に対する知識の少なさを後悔しながら、暖かいベッドから這い出た。

今になって思えば、とつても恥ずかしい事ばかりよね。まったく朝から変なことを思い出しちゃった。さつさと栄養補給をして、踊りの準備をはじめよ〜と！

一晩あたまをフル回転させても、なんの収穫も手に出来なかった私は、きつぱりと諦めて、寢室をあとにした。もちろん自慢の黒髪を、綺麗に整えてからのことだけだね。

「きゃ！ な、なにしているのよ?! 二人とも!」

「なにじゃないだろ? 遅いから起こしに行くよう言われてきたんだよ。お嬢様」

「おはようございます、エマ様。領主様と奥さまは、食堂にてお待ちです」

あゝ、びっくりした。通路の角からいきなり出てくるのだから! まったく、わざとやっているんじゃないの?

小走りに部屋を出た私は、食堂へ向かう途中、完全武装の幼馴染とはちあわせになっていた。

「ん？ お嬢様。なんか眼が赤いぞ。夜更かしでもしていたのか？」

「ラマ〜！！ お前のせいだっていうの！」

「あのね！ 誰が夜更かしなんかするもんですか。あんたと一緒にするなー！」

あいさつ代わりにラマへ放った私の鉄拳は、虫を払いのけるかのような軽い動作で、簡単に避けられてしまった。

「朝から狂暴な奴だな。年頃のお嬢様には、とても見えないぞ」

「あはは。ラマ、それはちょっと失礼だよ。エマ様は、昔から変わっていないだけなんだよ」

「おい！ シエノ。全然、私を誉めてないぞ！ 失礼なことを言っているのは、二人ともだよ！」

「はあ、なんか悩んでいたのがバカみたい」

いつもと同じ空気を運んできた仲の良い二人に、私は心底、安心感をおぼえていた。

これからも普通に接していける。なにげない冗談を言いながら、楽しく過ごしていける。私は、今までの関係を壊したくない一心で、目の前に迫った気まずい問題を、心の内へ深く沈みこませていた。

「エマ様、どうかしましたか？」

「え？ な、なんでもないよ。はやく行こーね。おなかペコペコだよ」

おっと、危ない危ない。シエノは人の考えを読むのがうまいから、

注意しないとね。だけど、私が昨日の会話を盗み聞いていたと知ったら、二人はどうするのだろうか？ いつもものように笑ってすませてくれないかしら？ は、無理だろうな。

朝からタメ息連発の私は、不信な表情で顔をつき合わせている幼馴染の二人を連れて、食堂へ入っていった。

「おはよう、エマ。遅いから心配したよ」

「おはようございます、母様、村長さん。それと父様！ 子供じゃないんですから、迎えなんかいりませんよ」

「エマ、あなたが心配されるほど遅く来るからでしょ。呼びにいつてくれたシエノとラマに感謝しなさい」

そんな、ちょっと寝坊しただけなのに、最近の母様はきびしいな。

「シエノ、ラマ。ごくろうさまでした。あなた達も朝食をすませてきてくださいね」

「はい、奥様。失礼します」

「食事のあと、外出する場合はお呼びください。今度こそ、一撃で倒されない様に努力しますので」

「こらー！ ラマの奴なに言ってるのよ！ 父様も笑ってないで、なんとか言つてよ！ あ、もう、あの筋肉バカめ、逃げちゃった。

村長さんも笑いをこらえて顔を赤くするくらいなら、爆笑すればいいわよ！

収穫祭開催

生意気な幼馴染の言葉に、朝から怒り爆発の私だったけど、さすがに空腹では追いかけて行けない。しょうがなく私は、小さなお腹の音と共に自分の席へ座り、温かなスープを口へ運びはじめた。

そーいえば、ラマに復讐するのを忘れていたわね。もー、いろいろあってそれどころじゃなかったもんな。今度にしよ、今度にね。今日は待ちにまつた収穫祭なのだから、楽しまなくっちゃ！

村長さんに雇われていると思われる中年の女性二人が、忙しく朝食を運ぶなか、私は一日中遊び続けるための燃料を、次から次へと口の中へ放りこんでいた。

隣りで母様が睨んでいるけど気にしていられないわ。だって、みんなの前で踊りを披露するんだもん。しっかり力をつけておかないと、途中で倒れちゃうもんね。

「んー、おいしかったー！ それじゃー、母様。私はいつも通り、みんなといっしょに参加しますから、先に行つてきますね」

「エマ！ お行儀悪いですよ。それに外へ行くなら、ラマ達と一緒にしないと許しませんよ！」

えー、べつに一人でいいのに。まっ、反論するのも面倒だから、連れていくフリだけしておこうかな。

「はい。分かっていますよ、母様。ちゃんと付いて来てもらいます。それでは！」

女は強く、世を渡る

片手を上げて食堂を飛び出る私の行動に、母様はちょっと呆れ顔だったけど、村長さんとは何年も前から知り合っているのだから、いまさら上品にしてもしょうがないよね。私がお嬢様っぽくないの

は、この村にいる全員が知っていることなんだから。

すっかり開き直った私は、鼻歌まじりに自分の部屋へ戻った。途中、やつかいな二人組に見つからないよう注意をはらっていたけど、べつに必要ななかったみたい。

私は、部屋の隅に置かれていた衣装入りの手提げ袋を担ぐと、収穫祭が始まるうとしていいる広場へ足を向けた。袋に入っている衣装は、私が踊りで使用する特別なものである。

「ふっふん。やっぱりお祭りはいいな。ワクワクする」

目覚めたばかりの時とは違って、少しずつ気分が高まってきた私は、すぐにでも踊りだしたい欲求を抑えながら、屋敷の玄関を抜け、外門をくぐり出た。

「やーっと来たか、お嬢さん。待ちくたびれたぜ」

「お待ちしてましたよ、エマ様。今日は丸一日、お供させて頂きます。それから、一応言わせていただきますが、私達を出し抜こうとしても無駄ですよ」

「そうそう、エマちゃんも単純だからな」

きー！！　なによ！　人をバカにしてー！　いつたい何時の間に先回りしたのよ！？　わざわざ見つからないように出てきたのにー！　私の背後で、人の神経を逆撫でるような発言をしているのは、いつものコンビだった。

「ラマ！　シエノ！　あんた達、ちよつとは礼儀つてものを勉強しなさい！　私はこう見えても領主の娘なんですからね！」

「どう見ても似合っていないな。なあ、シエノ」

「あははは。まあ、気品というものは人それぞれだからな」

「どういう意味よ！ もう、シエノったら、最近ラマに影響されているんじゃないの？ まったく、せつかくの良い気分が壊れちゃったわ。」

「ぬ〜、一人で行くこうと思っただけで、ついてくるって言うんならしょうがないわ。だけど、口うるさく説教なんかしないでよ。わかった？」

「ほ〜い。了解」

「承知致しました。エマ様」

あ〜あ、これで今回も一日中、二人に見張られてのお祭りになっちゃうな〜。最後まで一人で騒ぎたい気もするけど、ラマやシエノと遊べる機会も残り少ないし、まあ、いいかな？

「ラマ！ 荷物持ってよね。それと、シエノは何か飲み物を確保してきてよ！ 踊りは喉が乾くんだからね。分かった？！」

「わがままなお嬢さんだね〜」

「承知しました、エマ様。後ほど、着がえ場所がある教会へお持ち致します」

嫌そうに荷物を抱えるラマの隣で、シエノは一礼をしたあと、すばやく必要な物の調達へ動き出していた。

「なに不服そうにしているのよ、ラマ。護衛なら、ちゃんとそれらしくしなさいよね。もたもたしていると、置いていくわよ！」

「こりゃ〜、嫁にもらう旦那さんも大変だな。かわいそうに」

なんだとう！ 美人で身分も高い私を捕まえて、何がかわいそうだった〜？ 昨日みたいに、ぶっ倒してやるうかしら？

私は拳を震わせ、どうやって無礼な護衛を懲らしめようかと頭を

働かせていたけど、結局よけいな体力は使わないことにした。

「ふっふっん。残念でした！ 結婚相手は、私の美貌に夢中なのよ。第一、私と結婚する人が嫌がる訳ないでしょう？」

ラムを相手にすると、なぜか体力を消耗するんだよね。だから、今回はちょっと冷静な対応が出来るってところを、見せつけておきましょう。あんまり得意じゃないけどね。

「は？ なに言いつてんのよエマちゃん？ 俺にお漏らしした下着を洗ってもらった事もあるくせに。美貌？ 夢中？ いくらエマちゃんの魔術でも、無理があるんじゃない？」

「こ、こいつー！！」

気がついたら、私はラムを追いかけていた。

ホント、こいつつてば最低！ 昔の事を持ち出してくるなんて、なんて奴なの？ 確かに、幼い頃からラムとシエノは私と一緒にいたし、母様に分からないように下着を洗ってもらった事もあるけど。もう許さない！

「ラム！！ 年頃の女の子には、言っではいけない事があるのよー！ 私の魔術で黒焦げにしてやる！ 止まりなさい！」

「俺に追いついたら止まってあげますよー」

むかー！ 見てなさい！ 私だって踊りで鍛えているんだからね！ 天を覆っていた雲が勢力を弱め、太陽が元気良く顔を見せだした空の下、私は砂埃を上げながら全力で走っていた。目の前にいる憎たらしい道化男は、私をからかうように歩いたり走ったり……。悔しいー！！

「はあはあ、くるしい。もう、はしれない」
「ほい、ご苦労さん。あつという間に教会へ到着だ。さつさと着替えなよ」

ふう、あれ？ ホントに教会だ。村の人もいっぱいこっちを見ているし、また恥かしいちゃったみたい。うう、ラマと張り合うといつもこうなんだから！

「はあ、分かったわよ！ この筋肉バカ！ ふん！」

まったく、踊る前から疲れた！。喉も乾いたし、シエノ、早く飲み物持って来てよ！

私は背中に暖かい日差しを浴びながら、村の女性と共に教会の中へ入った。

朝早くから熱気のコモる教会の中は、どこを見ても女性ばかり。既に、多くの女性達が収穫祭の準備に忙しく働いていたようだ。目の前では、お祭り用の鮮やかな衣装へ着替えを行う少女達の姿も見られる。

「あ！ お姉ちゃん。おはようございまーす」

「エマお姉ちゃんおそーい。もう、みんな準備できてるよー」

あはは、みんな元気だな。私も負けずにがんばろつと。

「ごめんね、みんな。私もすぐに着替えるから」

えーと、最初は奉納儀式の舞いだから、袖のある白い衣装なんだ

けど、あれ？ どこいったかな？

持ってきた衣装袋をさぐる私は、昨日すっかりとたんで用意していたはずの儀式衣装が、見当たらないことに困惑していた。

「ん〜？ あ！ 中身がひっくり返ってる。どうして？ ってそう
だ！ ラマが乱暴に運んでいたからだ！ もう！」

私の脳裏に浮かんだものは、走りながら衣装袋を振り回している
憎たらしいラマの姿。

「エマ様。どうかなさいましたか？ 着替えのお手伝いを致しまし
ようか？」

「ああつと、なんでもありません。すぐに着替えますね」

優しく接してくれる村人の言葉に、急がなくてはいけない現状を
思い出した私は、袋の一番下から衣装を取り出し、教会の入口付近
で着替えを始めた。

いつもは休憩室で着替えるけど、周りには女の人しかいないし、
べつにいいよね。

私は、元気にはしゃぎまわる女の子達に囲まれて、自分の服を脱
ぎはじめた。

「人前で着替えるのって久しぶりだな。昔は良くやったものだけ
ど、おや？」

背後で扉の開く音を聞いた私は、静かに振り返る。

「あははは。エマ様、飲み物はここへ置いておきますね。それでは、
失礼しました」

振り返った私の視線は、引きつった笑いを浮かべながら扉を閉めるシエノを、冷やかに見送っていた。

シエノ！笑ってすむと思っているの！後で覚えてらっしゃい！！

上半身裸で拳を握る私は、呆然としている村人が見守る中、仕返しの方法を考えながら素早く着替えを済ませるのであった。

「ぶはははは！！シエノも男だね。女性が着替えている場所へ入って行くなんてよ。で、お嬢様はちゃんと成長していたか？どうなんだ？」

「ラマ！変なこと聞いてんじゃないぞ！あんたも私の張り手を食らいたいの？」

教会を出て、村の中央に用意された儀式舞台へ向かう途中、ラマは笑ってばかりいる。

めったにないシエノの失敗を、心底喜んでいるように見えるラマだったけど、本当は自分が覗きたかったんじゃないのかな？もしかして嫉妬しているのかも？

「あの、本当に申し訳ありません。まさか、入口のすぐ近くで、着替えているとは思わなかったもので」

両頬を紅く腫らしたシエノは、本当に反省しているみたいだ。

まあ、幼馴染なんだし、私はべつに気にしてないけどね。

「だよな。いつもは休憩室のはずだったし、それが扉の前で着替えているとは思わないよな」

「ラマ！なに喋っているんだ！」

「へ、私が休憩室を使っているって、どうして知っているのかしら?」

顔を蒼くする二人を前にして、私は思いつき張り手をくりだしていた。

「も、最低ね! 私が初めて村に来たときから、覗きをしていたなんて。変態!」

村人が集まっている舞台へ到着した私は、多くの知り合いへ挨拶を済ませたあと、かるく柔軟をしながら護衛の二人を虐めていた。

「いや、その。あはははは」

「だから、見張っていただけなんだってよ。他の奴が覗けることに気づいたら、大変だろ?」

こいつ等々! まったく反省してないな。

「ラマ、シエノ。母様に知られて、給料減らされなくなったら、私の機嫌を損ねないことね」

「い?! 嘘だろ? 今だってそんなに貰ってないっていうのに!」

この筋肉バカめ! 人の着替えを覗いておいて、なに言っているのよ! 私のほうが、いくらか貰いたいくらいよ!

私の不満を知りもしない二人の幼馴染は、自分の収入が減るかもしれない事実を前にして、ようやく危機感を感じ始めているようだ。まったく最低な奴等よ!

「あの、エマ様。そろそろ式祭が始まりますが、準備は御済みで

女は強く、世を渡る

「しょうか？」

「あ！ はいはい。大丈夫です。今行きますね。つと、シエノにエマ！ 私の護衛なんだから、ちゃんと側にいなさいよ。今日一日しっかり務めたら、覗きの事は忘れてあげるから、ね！」

護る為の戦い

一瞬、儀式の事を忘れかけていた私だったけど、声を掛けてくれた村人のおかげで、なんとか自分の役割を思い出すことが出来た。

ふう、危なかった。年に一度の舞台で遅れたりしたら、とんだ笑いや者だわ。

「さてと、今日は踊りまくるぞー!!」

完全に目を覚ました太陽が、ところかまわず熱い視線を送る中、私は村の外に設置された屋外舞台へ立っていた。

目の前には、性別や年齢がまったく統一されていない村の住人が立ち並び、舞台の上には、赤と青を基調とする愛らしい衣装に身を包ませた少女達が、私の到着を待っている。

「さあ、始めましょう」

静かな私の合図が、舞台上に響く。そして例年と変わりのない収穫祭が、幕を開けたのであった。

私の言葉に続いて、舞台と村人を囲むように配置していた音楽隊から、穏やかな柔らかい音色が響きはじめ、私を取り巻いていた少女達が第一歩を踏み出す。

幾度も練習していたと思われる連携の取れた静かな舞いは、去年と比較しても劣ることの無い素晴らしいもので、私を刺激してくれる。

私も負けていけない。自分でも最高と思うような踊りで、皆を驚かせてやるんだ。

ほぼすべての村人が視線を注ぐ中、私は爪の先まで意識を張り巡らせ、静かな奉納の舞いを神に捧げはじめた。

薄雲を払いのけた太陽が、収穫祭の始まりを見届けてから幾刻の後、地上の舞台では多くの松明が掲げられていた。晴れわたる空の下で肅々と行われていた儀式は、いつの間にか鮮やかな紅色に染められ、薄暗くなった夕空と肌寒い空気が、熱気のこもる舞台をすぐ近くから眺めている。

「うっひ〜！ のど乾いたー。シエノ、飲み物ちょうだい、飲み物！」

踊りが一段楽しめた私は、舞台の裏にある小さな空間に腰を下ろし、控えていた幼馴染にのどの渴きを訴えていた。

「はい。こちらに用意してあります。どうぞ、エマ様」
「お疲れ、お嬢さま」

今日のお祭りは、思っていた以上に長くなりそう。

「奉納の舞い」に始まった舞台は、続いて「翌年の収穫を祈る舞い」。途中お昼休憩があつて、さらに「村民の繁栄を感謝する舞い」となり、おまけに今年から「領主様の健康を祈る舞い」が新しく追加されるという内容になっていたからである。

「んも〜、追加される内容があるんなら、もっと早く教えてよね〜。いくら私でも、即興で踊るのは大変だよ」

「自分で飛び入りしたくせに、なに言っただ？ 村の人達は、見ていてくれればいいって言っていたぞ」

「まあまあ、エマ様は参加しないと気がすまない性格なんだから、仕方ないよ」

ぬ、確かにラマとシエノの言う通りだけど、なんか釈然としな
いな。とつても反論したくなるのは何故なんだろう？

「二人ともうるさい！ 次は櫓を囲んでの踊りなんだから、さっさ
と移動するわよ！」

「ほい」

「承知致しました」

相変わらずの返事のため息をつく私は、疲れる身体に気合を入れ
なおして、腰を上げた。

村で行われる収穫祭は、大きく二つに分けられている。一つ目は、
村の屋外舞台で昼に行われる一連の儀式。二つ目は、教会の近くに
建てられた櫓の周囲に集まって開かれる、全員参加型の自由な踊り
となっている。

もちろん私も、村の皆に混じって踊り騒ごうと櫓を目指していた
けど、途中、別の衣装へ着替えるため、教会へ寄り道をしていた。

「ちょっと分かっているわね。覗いたら酷い目に合わせてやるから。
分かった?!」

「了解!!」

珍しく返事をそろえた二人だけど、どうも目が笑っているように
見えてしまう。まったく、全然懲りてないんだから！

私は鋭い視線を放ちながら、教会の扉をゆっくりと閉じた。

「ふう、ちょっと疲れた。最後だからって、はりきり過ぎたかな
?」

そうなんだな。もう、この村に来ることは二度と無いんだ。明
日になったら村を出て、屋敷に帰って、すぐ結婚準備をしないとい

けないんだよね。あゝ、やだやだ。

先程まで高揚していた気分が、すっかり冷めていくのを感じる私は、諦めのため息を吐きながら、衣装を脱いだ。

教会の外では、多くの人々の姿が見える。子供、夫婦、老人、恋人達。清らかな大気と、燃え盛る松明に囲まれた村人は、肩を寄せ合い笑顔で語り合っている。ガラス窓一枚で遮られた目の前の暖かな世界は、私にとってとても魅力的で、手に入れることの叶わない樂園に見えた。

「いいな。私もこんな村で暮らしてみたいな。けど、そうすると私も畑仕事をしないとイケないんだよね。うん、自信ないな。」

腰紐を結びながら教会の窓を覗く私の心は、一人だけ違う世界へ置いて行かれたような孤独感に浸されてしまう。

教会の中を支配する空気が冷たい。そう、まるで私の居場所がこの村ではなく、冷酷な政界にあるのだと言っているかのようだ。

「あー！ もう！ 暗くなってどうするの、エマ。最後なんだからしっかり踊らないと！」

気合と共に、髪を結んでいたリボンをしっかり結び付ける私は、教会の正面扉を勢い良く跳ねとばす。

「おまたせ。二人ともちゃんと見張っていたでしょうね？」

「あはは。大丈夫ですよ。信用してくださいよ。」

「そうそう。第一、いまさらエマちゃんの中途半端な胸を見たってな。」

ぐぬぬ！ この変質者め。まったく、もう怒る気にもならないや。だけど、中途半端ってどういう事よ！ 自分ではかなり良い方だと

思っているのにー！

相変わらず私を悩ませてくれる二人の幼馴染は、薄暗い闇の中、村の女性達に囲まれながら、にやけ顔で立っていた。着飾った女性を前にしている二人の様子からは、とても真面目に見張っていたとは思えない。

「ラマ、シエノ。さっさと行くよ」

こいつ等は、私を護衛することが仕事なのに、分かっているのかな？

私は、複数の理由が絡み合う妙な怒りを覚えながら、櫓近くに説明を持って集合している村人の中へ、勢いよく走り込んでいった。

「待って下さいよ、エマ様」

「元気が有り余ってたんだよ。困ったお嬢さまだ」

役立ちそうにない護衛二人を無視して、私はすぐさま村人の輪に入って踊り始める。だけど、足元から伝わってくる妙な振動が、私の気を乱していた。

なんだろ？ どんどん振動が強くなっていく感じがする。この辺りで地震があったなんて、聞いた事ないけど……。

「ラマ！ シエノ！ ちょっとこっち来てよ」

不思議そうな顔を並べる村人を前に、私は少しばかりの不安を抱えながら二人の幼馴染を呼んだ。

「なんだよ。まじった、変なことでもしたのか？」

「エマ様、何か問題でも？」

口調とは正反対に、素早く私の側へ駆け付ける二人は、呼んだ理由を話すまでもなく、地面から伝わってくる振動へ不信感を表す。

「ねえ、なんだと思う？ 地震？」

「少々お待ち下さい、エマ様」

周囲の村人へ静かにするよう合図を出すシエノは、地面に耳をつけて、振動の原因を探っている。

だんだん大きくなっていく振動。辺りを囲む夜闇。燃え盛る松明の音だけが、辺りに響き渡り、私を含む多くの村人達の不安を煽っていた。

「これは！」

え？ どうしたって言うのよ、シエノ！

「エマ様！ これは馬です。馬が走るときの振動です！ それも、十騎や二十騎ではありません。五十騎以上と思われれます！」

「盗賊か？！ こんな辺境の村に？ 嘘だろ？！」

「ラマ！ ちょっと静かにして！ ええっと、どうしよう？ 盗賊ですって？ 国境の警備兵じゃないの？」

一瞬にして騒然となった村人を前にして、私は何をすべきなのか判断がつかない。

「エマ様。振動は村へ真っ直ぐ向かって来ているようです。国境警備の者なら、これほどの速度で村に突撃してくることは考えられません。これは、間違いなく盗賊です！」

「そんな！」

嘘でしょう？ どうして、警備の兵隊も居ない小さな村に、大勢の盗賊がやって来るって言うのよ！ なんてよ？！

「エマお姉ちゃん。何があったの？ 大変なこと？ わたしも手伝うよ」

恐怖で震える身体を必死に支えている私は、一人の少女に言葉をかけられていた。黄色を基調とした可愛い衣装に包まれた少女は、下唇を噛みながら私を支えてくれている。何が起きたのかも分からず、不安でいっぱいのはずなのに……。

（エマ。私達のように領地管理を任された者には、やらねばならぬ事がある。それは、領民を守ること。知恵を出し、勇気を出し、より多くの領民を守る。たとえ、自らが侮辱されるような事になっても、領民の安全を優先する。分かるかい？ エマ）

私は小さな少女の頭を撫でながら、幼い頃に聞いた父様の言葉を思い出していた。

そうだね、父様。震えている場合じゃないね。行動しなきゃ、今すぐに！

「ラマ！ 村のみんなを教会へ非難させて！ この場所は危険よ！ それとシエノ！」

「お側に！」
「先に教会へ行って、すべての窓を塞いでちょうだい。お願いできる？」

「お任せ下さい。エマ様も、一緒に教会へ」
「だめよ！ 父様たちが村長さんと屋敷に居るはずだから、呼んでこないと！」

そうよ！ 夕方からの祭には参加するって言っていたのに、顔を見せないってことは、まだ屋敷で仕事をしているんだわ。急がないと取り返しのつかないことになる！

「いけません！！ 今から向かったのでは、間に合いません！ 領主様には、腕の立つ騎士が何人も付いていますから、エマ様は教会へ！」

叫び声を上げるシエノが、私の腕を掴んだその時、村長の屋敷がある方角から、大地を揺らすよう雄叫びが聞こえてきた。

「エマ様！ もう、どうにもなりません！ お早く！」
「父様！ 母様！！！」

大勢の村人が教会へ急ぐ中、諦めきれない私の叫びは、相手に届くこともなく、足音にかき消されてしまうのであった。

殺人魔術

暗闇の中、多くの村人が訳も分からず走り出すことになってしばらくの後、最後の一人と思われる老人が、教会の正面門へ到着していた。

「これで全員？ ラマ！ どうなの？」

「大丈夫。間違いない。広場に居た村の者は、これで全員だ」

「エマ様！ 見て下さい！」

突然の大声に驚いて振り返ると、板を打ち付けて窓を塞ごうとしていたシエノが、教会の外を指差している。

「何があつたの？！ え？ あれは火事？ 火をつけられたの？
なんてことを！」

私が視線を向ける先では、民家の一つが激しい炎に包まれていた。どうやら、馬に乗って入り込んで来た何者かが、放火したらしい。

「信じられない！ 最初っから殺す気なの？ 盗賊でしょ？ どうして？」

盗賊とは、金や物を奪っていく武装集団のはず。だけど私の目は、金品を漁ろうともしないで放火を重ねていく、小汚い男達の姿が映っていた。

「エマ様！ 数名こちらへ向かってきます！」

シエノの叫びと同時に私は、盗賊と思われる武装した人間を三名

ほど、教会の正面入口へ走ってくるのを確認していた。

「シエノ！ 窓を塞ぐのはもう良いから、降りてきて！ それとラマ！ あなたは、男の人を何人か連れて裏口をお願い！」

一刻の猶予も許されない事体ではあったが、もう私が慌て出すことはなかった。なぜなら、私のやるべき事は村の住人を守ること、ただその一点のみであると理解できたからである。

「そうよ！ 今は、自分に課せられた役目を全力でやるのよ！ 父様たちが気にはなるけど、村人の安全が最優先だわ。父様だって、きつと分かってくれる。」

「よし！ みんなー！ 今から私のいう事を聞いてください！ まず、女性と子供達は教会の中央で固まって、決して窓際には近付かないこと！ 次に男の方は、机を子供達の周囲に集めて壁を作ってください。それから……」

「エマ様！ 盗賊どもが正面に来ました！」

「分かったわ！ シエノ、相手が扉の前に来たら、開けてちょうだい。思いつきりね」
「え？」

奇妙な指示を受け、困惑の表情を浮かべるシエノであったが、私が見を閉じ精神集中に入っただのを受けて、何も言わずに扉の取っ手を握り締めた。

「さ迷う目的無き魔の力よ。我が意思により束ねられ、三叉の矛とならん」

教会内に居る者が一同に困惑の表情を見せているのは、私の口から発せられた言葉を、まったく理解出来なかったからであろう。

私は、母様から譲り受けた指輪と髪飾りを青白く輝かせ、魔術言葉を唱えていた。

「エマ様！ 開けます！」

仁王立ちになっていた私の目の前で、シエノによって勢いよく扉が開かれる。

「必中たる破壊の矛よ！ 我が敵を刺し貫け！！」

目を潰さんばかりの輝きを残して、私が放った銀色の矛は正面扉を潜り抜けていく。

光が去った後、教会正面の石段を昇ろうとしていた盗賊たちの姿が見えてきたが、その盗賊三人には、あるべきはずの頭部が無かった。

「きゃあああー！！」

人形が壊れたかの様に、崩れていく盗賊の死体を目の当たりにした村人は、気が狂ったかのような悲鳴と共に、逃げ出そうとしてしまふ。

「黙りなさい！！ 相手はまだまだ居るのよ！ 自分達が同じ目にあいたくなかったら、私の指示を聞きなさい！！」

一瞬にして三人を死に追いやった私は、怒りを隠すことなく村人を叱咤する。

この程度で騒いでどうするのよ！ まだ何十人もいるっていうのに、相手を殺さなかったら自分が死体になってしまふのよ！！

「さあ！ はやく動いて！ 女性と子供は中央、男性は机を移動させて、手の開いている人は窓から周囲を見張って！ それとシエノ！」

「はい、エマ様」

「盗賊の死体から使えそうな武器を剥ぎ取って、裏を見張っているラマのところへ持って行ってちょうだい」

「し、承知しました」

笑顔で答えるシエノではあったが、顔色は良いものではなかった。私の指示になんとか動き出す村人も、祭の時とは正反対に、何か恐ろしいものを見るかのような視線を、私に浴びせかけている。

父様、私間違っていないよね。私のやっていることは正しいよね。そうでしょう？ 父様！

「おお、お嬢さま！ 大変です！ 外に、櫓の周りに盗賊が集まりはじめています」

「なんですって？ 何人ぐらい？ こっちに向かっているの?!」

「いいえ。ゆっくり集まっているだけで、数は百人近くです。ですが、こつちを見ている者は何人かいます」

どうしよう？ 私の魔術だけでは、どうしようもない数だわ。私達が教会に隠れているのは、もう分かっているだろうし、一度に向かってきたら終わりだわ。

不安そうに窓の外を見張る村人をよそに、私は自分の考えに没頭していた。

「エマ様、ラマに武器を渡してきました。裏口は今のところ問題ありません……。エマ様？ 大丈夫ですか？」

「うー!? あつ？ ああ、シエノ。ご苦労様。こつちは問題だらけよ」

厳しい顔で私を気遣うシエノは、剣に手をかけたまま、正面扉へ向う。

「なるほど、これは大問題ですね。いくら私でも百人は斬れませんよ」

「も〜！ そんなこと分かっているわよ。それより、なんか良い手はないの？」

軽い口調に戻っているシエノと話す私は、少しばかり落ち着いてきたようだ。薄暗い教会の中をゆっくり見渡す余裕もでき、怯えきっている村人の表情も読み取ることが可能になってきている。

さうで、教会は頑丈に造られているから、ろう城するにはもってこいだけど……。火をかけられたら手も足も出ない。食糧と水は、祭用に保存していたものが少し有るだけだし、百五十名ほどの村人に分け与えていたら、二日も持たないよ。

「どうしよう。このままじゃ、どうしたって助からないわ。せめて何か武器になる物はないかしら？」

いくら頭をひねっても、名案の一つも浮かんでこない私は、今まで何を学んでいたのかと、自らを叱咤していた。

「武器ですか？ そうですね。ちょっとお待ちくださいね」

「シエノ、何するつもりなの？」

私の疑問に無言の笑顔で答えるシエノは、軽い足取りで教会の一番奥まで行くと、松明に照らされて幻想的な姿を見せている神像の前に立った。

「せーの！ それっ！！」

あまりに突然の出来事で、私は声も出せない。

シエノは、村の象徴として崇められていた神像を、私の目の前で粉々に叩き壊してしまっただのである。

「シエノー！ 貴方なんてことをするの?! 正気?!」

信じられない！ 水と大地を司るマーラミレの神像は、農耕を仕事にしている村人にとって大切な心の拠り所なのに！ どうしちゃったのよ、シエノ？

「あはは。いやだな。もちろん、正気ですよ。それでエマ様、これって、ちよつとした武器になるとは思いませんか？」

え？ 武器？ 神像の欠片が？

「投げるんですよ。弓も剣も使えないなら、石でも投げるしかないでしょ？ さあ、皆さん！ 自分の大切な人を助けたいのなら、欠片を手に持ちなさい！ 盗賊どもが近づいてきたら、思いつきり投げつけるのです！ 分かりましたね！」

笑顔のままに怒鳴りつけるシエノは、妙な迫力を持って村人を突き動かしていた。

「シエノ……」

「エマ様。先程、ラマとも話してきましたが、ここはもうダメです」

声を低くして私に話しかけるシエノは、もう笑顔を見せてはいなかった。

「裏口は思ったより手薄ですから、逃げるなら今しかありません。ラマが裏で待っていますから行って下さい！」

な？！ 何を言っているの？ 逃げる？ 私が？ 村人を置いて？ そんな！ 「冗談でしょ？！ まだ、父様たちの安否も分かっていないって言うのに！」

「嫌です！ いま逃げてどうするのよ。あなた一人で、百人の盗賊と戦うって言うの？ そんな事させられますか！ 私はあなたの雇い主なのよ！」

「エマ様！ 我を張っている場合ではありません！ 相手は大勢なんですよ。戦いを知らない村民が、石ころを投げつけたところで勝てるわけがありません。しかしそれでも、エマ様を逃がすくらいの時間は稼げるはずですよ！」

私の両肩を掴んで、必死に説得を重ねるシエノは、普段の優しいな面影を消し去り、生死を賭ける戦士の顔へ変貌を遂げていた。

「今、外は完全な暗闇です。雲も少し出ているので、逃げるには好条件です。私が正面で注意を引きつけている間に、行ってください。お早く！」

そんな！ そんな事言われても、行けるわけじゃないじゃない！ シエノのバカ！ 私が領民に支えられて生きてきたのは、こういう時に皆を助ける為じゃないのよー！

「シエノ！！ 私は……」

覚悟を決めた一言を、シエノへ伝えようとしたちょうどその時、

見張りをしていた村人の一人から声が上がった。

「お嬢様！ 盗賊が何名か、こっちへ来ます！ ど、どうしましょう？？」

怯えきつた男性の一言に、松明の炎だけで明るさを保っていた教会の中は、深い暗黒に落ちたかのような重い空気に支配されてしま

う。
「シエノ！ もう遅いわ。戦うわよ！」
「……エマ様は、私の命に代えて御護り致します」

シエノなら、本当に私の為に命を投げ出してしまうのだろう。昨日の夜に聞いたラマとの会話から、シエノの言葉が、建前などでは無いということが良く分かる。
私は、目の前にひざまずく私だけの騎士へ近づき、頬に軽くキスをした。

「あなたが神様の像を壊してしまったから、代わりに私が幸運を祈ってあげる。幸運の女神が祈るって言うんだから、絶対に死ぬ事は許さないわよ！ 分かった？！」

驚いたように目を見開いてしまふシエノだったけど、すぐに柔らかい笑みを見せてくれる。

「あはは。本当にワガママな女神様ですね。お祈りは効力有りそうですね。」

「うん！ いつもの調子が出てきたみたい。それじゃ、行ってみようか！」

「よし！ みんな！ 手分けして窓に張りついてちょうだい！
入り込もうとする盗賊がいたら、石でもなんでも思いつきり投げつ
けて、追い払うのよ！」

皆からの返事は、かき消えそうなほど小さいものではあったけど、
少しずつ勇気を振り絞ろうとする必死な気持ちで、一人一人の瞳の
中に見え始めていた。

「エマ様。こちらへ向かってきた盗賊どもですが、何か呼びかけて
いるようです」

「どうせ、抵抗せずに出て来いとかでしょ？ ちょうど良いわ。話
し合いなら、やってやるうじゃないの！」

正面扉から様子を探っていたシエノに対し、力強く構えて見せた
私だけど、空元気である事は、すっかりバレているみたい。

「お供致します」

優しく寄り添ってくれるシエノは、私と共にゆっくりと扉を開け、
家屋の燃え盛る炎により明るくなっている教会正面へ、覚悟の一步
を踏出したのであった。

死の嵐

教会の正面、三十メートルほどのところで、馬に乗った八人の盗賊は待っていた。

まったく、いかにも盗賊と言った嫌な感じの人間だわ。勝利を確信したような、にやけた表情が癪に障る。今に見てなさい！

私は、教会へすぐに戻れる距離を計算しつつ盗賊どもと向き合い、先制の一声を投げつけた。

「私は村を代表する者です！ あなた方は何者です？！ いったい何の目的でこの村を襲撃するのですか？！」

シエノに支えられながらも、必死に威嚇を放とうとする私の言葉は、盗賊相手にほとんど効果を見せてくれない。

「おいおい、こりやまた、すげえ美人じゃねえか。この村にはもつたない掘り出しもんだぜ。わざわざ、こんな辺境まで来たかいがあつたつてもんだ」

「おい、ねえちゃん。俺達は、別に襲撃なんかしちゃいねえぞ。もしかして、盗賊だと思っているんじゃないやねえだらうな？」

「言っておくが、火をかけたのは寒かったからだぜ。悪気はねえんだ。そこんとこ勘違いすんなよな」

次々と勝手な事を言い始める男どもに、私は激しい怒りを覚えてしまう。

なにを言っているのよ、このバカどもはー！ 大勢で押しかけてきて、村中に放火しまくって、盗賊じゃないですってー！ 弓や剣で武装した醜男どもが、ふざけたこと言うんじゃないわよ！

「この〜！　そ、それでは、すぐにこの村から出ていってください！」
「そうはいかねえ！！」

怒りを押さえながらの私の一言に、リーダーらしき男がすぐに反論をしてきた。どうやらこの男は、言葉遊びに興じるつもりはない様子である。

「ねえちゃんよ！　俺達は仲間を探しているんだ。さっきまで一緒だった仲間が、三人ほど足りねえ。今も探していたんだが、どうやら教会に向かったって言うじゃねえか。どうだ？　ねえちゃん、なんか知っているんだろ？　ほら、石段の下にある布は何の為に置いてあるんだ？　その赤い染みは？　布の大きさから言うと、ちょうど人が三人ぐらい隠れる大きさだよな」

教会の正面扉につながる石段の下には、私の魔術で肉の塊になった三人の盗賊が置かれていた。シエノによって布をかけられ、その姿は隠されていたものの、首から吹き出た血の染みまではどうにもならない。

「し、知りません！　あなた達の仲間なんか知るもんですか！」

私は、シエノの手を強く握り締めながら思いつきり叫んだ。しかし、数で圧倒的な優位を誇っている盗賊たちには、単なる虚勢にか見えなかったようである。

「おいおい、仲間を殺しちまったようだな。それじゃ、俺達も遠慮する必要は無いってこつた。おい！　お前ら！　教会にいる奴らを引きずり出せ！　女子供は殺すなよ。俺達の報酬なんだからな！」

妙な台詞を残す盗賊のリーダーは、右手に持っていた松明を高々と上げ、後方で集まっていた多くの仲間を呼び始めた。

「エマ様！ 御下がりください！ ここは危険です！」

「いいえ！！ 勝負するなら今よ！」

そう！ 相手は完全に油断している。

薄ら笑いを浮かべるリーダーに、後方から迫ってくる盗賊たち。

その密集した状態は、まさに魔術を使う者にとって最高の条件となっていたのである。

「さ迷う目的無き魔の力よ！ 我が意思により束ねられ、炎の塊を生み造らん」

私は両手を高々と掲げ、いぶかしげに首を傾げる盗賊のリーダーを睨む。

「砕くは肉の身！ 貫くは儂き命！ 燃やし尽くすは己が敵なり。我が手より飛び放たれし、爆炎の鳥よ！ 定めたる敵の魂へ食らいつき、噛み砕け！！」

複雑な術式と過度の集中力。大気中に漂う魔力を思うままに操るには、想像以上の年月と努力が必要である。私は物心がつく前から英才教育を受けていたけど、殺人魔術を人へ使う事は、今日まで一度として無かった。そんな私が今、大量虐殺用の火炎魔術を使うおうとしている。

なんて愚かな！ 人を守る為に、人を殺す。私が目指していたものは、こんな事ではなかったはずなのに！

流れ落ちる涙を止められない私の手は、迫り来る盗賊たちへ向けられ、同時に青白く燃え盛る炎の塊も、動き出したのであった。

「シエノ！ 伏せて！！」

すべてがゆっくりと動いていく私の視界で、暗闇に浮かび上がる小さな炎の鳥達は、人波へ姿を隠し、直後に弾け飛ぶ。

「うーおおー！！」

「げぎゃああー！！！！」

その時私は、血の雨と言うものを初めて目にした。

いいえ！ 血だけじゃない。手や足、半分欠けた人の頭、馬の首、肉の身に詰まったありとあらゆる臓物が、夜闇の中を切り裂いて、私の頭上へ降り注いだのである。

「ひい！ ひいー！！」

「しっかりとしてください、エマ様！ まだ終わっていません！」

シエノに抱えられた私は、血に塗れたまま教会の中へ連れこまれた。

「みんな！ 持ち場につけ！ ここが正念場だぞ！！ 死にたくないかったら、相手の首に噛みついてでも中へ入れるんじゃない！」

そう、そうなんだ！ 私の魔術に巻き込まれた者は、ほんの一部にしかすぎない。本当の戦いはこれからなんだ！

「シエノ、離してちょうだい。私は大丈夫だから……」

弱々しくお願いする私を、不安そうに見つめるシエノは、片手に細身の剣を構えながらひざまずく。

「エマ様。相手は魔術を受けて動揺しております。もう少しです。もう少しがんばってください」

「うん。分かっている。貴方も負けないでね」

シエノの言葉が、気休めに過ぎないという事は解っている。

教会を取り巻く怒号の嵐は凄まじく、すぐに私自身をも取り込んでしまうのであろう。

「だけど私は諦めない！ もはや魔術を行使するだけの力は残っていない私だけど、最後の最後まで抵抗してやるんだ！」

先の見えない真夜中に、無気味な姿を浮かべる教会では、私が参加した最初の戦いが無情にも開始されてしまったのである。

一年に一度の収穫祭が、突然の乱入者によって粉々に粉碎されてしまった辺境の村では、静かに夜が明けようとしていた。

村の中心において大きな姿をみせている教会は、無残にもすべての窓が打ち砕かれ、あちこちに赤い染みの跡が見られる。また、教会の周囲には、村人とは思えない風体の男達は何人も倒れており、教会正面のバラバラ死体と共に地獄絵図を描き出していた。

「うーん。うえ？ あれ？ 私、今寝ていた？」

「ほんの少しです、エマ様。盗賊どもに動きはありませんから、寝ていても大丈夫ですよ」

教会の正面扉にもたれかかっていた私は、いつの間にか寝ちゃったみたい。

昨日、踊っていた疲れが出てきたのかな？ いけないな！ まだ危険は去っていないって言うのに！

真夜中に行われた盗賊たちの一斉攻撃は、村人の協力もあって、なんとか凌ぐ事が出来た。もっとも、一時的に追い返しただけに過ぎず、現在でも盗賊たちは松明の燃えカスが残る櫓を囲んで、こちらを監視している。

「私より、シエノこそ寝たほうが良いんじゃないの？ 顔色悪いよ」

シエノの活躍は凄まじいものがあつた。教会内へ入り込もうとする盗賊たちを、次々と切り捨てては武器を奪い、村人へ手渡ししていたのである。それでも、村の男性が二十数名ほど犠牲となつてしまつたのは、どうにもならない現実……。

「ねえ、シエノ。私、今回初めて人を殺したの。だけど、少しも心は痛まないわ。私、おかしいのかしら？」

「エマ様……」

「だって、ラマだって、屋敷に入り込んできた泥棒を斬つた時は、一晩中泣いていたじゃない。それなのに私は」

悲しげな表情を見せるシエノの前で、私は、己が非情な人間なのかもしれないと嘆いていた。

こんな時に、私は何を言っているのだろうか？ 目の前であまりの多くの死体を見たものだから、頭が変になつたのかな？ こんな愚痴を言っている場合じゃないのに。

「そりゃ〜、エマちゃんの神経が図太いからに決まってるだろ？」

俺と一緒にされちゃー困るぜ」

「この声は〜！ まったくもう、元気そうじゃないの！ ラマ」

視線を上げると、そこにはもう一人の幼馴染の顔があつた。イジワルな笑顔を浮かべてはいるものの、激しい戦闘を潜り抜けてきた

疲労は隠せていない。

「ラマ。裏口の様子はどうだったんだ？ 被害は何人ほどだ？」
「ん〜、正義感の強い若者が二人ほどやられたよ。ってそんなことより、シエノ！ お嬢ちゃんを逃がすはずだったのに、どうして来ないんだよ！ 用意して待っていたのによお」

裏口での戦いは相当厳しかったはずなのに、ラマの口調はいつものように軽い。

「ラマ！ シエノは悪くないのよ。私が逃げないってワガママを言っただけなの！」

「んじゃ〜、今からでも遅くない。行くぞ！」

え？！ ちょっと、ちょっと待ってよ！ いまさら、なに言ってるのよ。って、腕を掴むんじゃないのよ！ この、馬鹿力野郎！

「待って！ 待ってよ！ シエノ、止めてー！」

「えっと、その〜」

「なにやってんだよ？ 行くぞ、シエノ」

くそ〜！ 人の話しを完全に無視して、なんて奴なの？！

「ラマ！！ 手を離さないと、この場で舌を噛みきるわよ！」

「いっ？！」

私が本当に舌を出して噛み始めると、ラマは驚いたように手を離した。

ざま〜みなさい！ けど、ちょっと舌が痛い〜。力を入れすぎちゃったかな？

「ラマ！ 私は、最後までこの場に残ることにしたのよ！」

「この、おめでたいお嬢ちゃんは一！　ワガママ言うのもいい加減にしる！」

「うるさいうるさい！！　そっちこそ私のことが好きなら、私の意思を尊重しなさい！」

先程までの疲れも忘れて怒鳴りつける私は、勢い余ってか、寝不足の所為なのか、言うべきではない事まで口にしてしまっていた。

「あつ！　えつと、その〜」

「どういうことだ？　シエノ」

「私は、なにも言っていない。恐らくは、あの時……」

一瞬にして気まずい空気を漂わせてしまった私は、睨んでいるラマの目をまともに見ることも出来ず、うつむいたまま髪をいじる事しか出来ない。

「分かったよ、勝手にしる！　俺は裏口を見張っているからな！」

あゝ、怒らせちゃった。こんな大変な時に、私ったら何やってい
るんだろっ？

去って行く幼馴染の後ろ姿を眺めながら、私は深いため息をつい
た。

「エマ様、いつ頃から知っていたのですか？」

「うう、ごめんなさい。村に着いた最初の夜に、あなた達が話し合
っているところを聞いちゃったの」

というより、盗み聞いていたのだけど、とてもそんな事は言えな

いや。

「別に良いのですよ。本当の事なんですから。ラマだって、怒ったわけではありません。照れているだけです。まっ、恥ずかしいのは私もなんですけどね」

朝日が射し込む教会の中でシエノは、苦境に追い込まれている私達の現状を、忘れさせてくれるかのような、華やかな微笑を放っていた。

本当にシエノは凄い。死ぬかもしれないこんな時に、他人への配慮を続ける事ができるなんて。最後になるかもしれないこの時、シエノが居てくれて本当に良かった。

「エマ様？ エマ様。どうして泣くんですか？ 私は怒ってませんよ」

あれ？ いつの間にか泣いていたみたい。

「だ、大丈夫。なんでもないので、気にしないで。えへへ」

静かな寝息とすすり泣きが混ざり合う教会の中は、先程までの死闘が嘘であるかのように、ゆったりとした安らかな時間が流れていた。

選択

「シエノー、これからどうするべきなのかしら？」

膝を抱えたままの私は、視線の先に集まっている盗賊達を見つめながら、胸に潜む不安を口にする。皆を代表する私が、弱音を言うのは良くないことなんだろうけど、今ぐらいは許して欲しいな。

「そうですね。まず、夜が明けた以上、逃げる事は不可能でしょう。だからと言って、戦っても勝ち目は無い。さて、どうしたら良いんでしょうね？」

あははは、そうだね。って、気休めでも大丈夫ぐらい言いなさいよ！ もう、覚悟を決めろって事なの？

「正直ありがたいことね！ もう！」

「どういたしまして。ところでエマ様、盗賊どもが動き出しましたよ」

え？！ うわっ、ホントだ。馬に乗った盗賊が五人ほど、こっちへ向かっているのが見える。

「さて、どうします？」

「聞くまでも無いでしょ！ 私は、村の皆を差し出すつもりは無いの！ 徹底的に抵抗して、警備隊を待つ。それだけよ」

私は胸を張って立ちあがると、シエノを連れて教会の扉をくぐり
でた。

盗賊達が少人数で向かってくるという事は、話し合いが目的なの

であろう。だけどそれならば、まだ希望はある。

「私達を襲つても得にならない、と思わせる事が出来れば……なんとかなる！」

私は、小さな希望の灯を胸に、顔を隠した盗賊達の前へ立ち塞がった。

「あなた達！ これ以上の戦いは無意味よ！ 私達は、愛する人を守る為なら最後の一人まで抵抗します。これ以上、犠牲を出したくないのなら、村から出て行きなさい！」

精一杯の虚勢を張る私は、脅しのつもりで魔力操術の基本姿勢を盗賊どもへ見せつけていた。もっとも、魔術の知識が無い者にとつては、身体の前で両手を組んでいるだけにしか見えていないのだと思っただけ。何もしないよりマシって事よね。

「あなた達も、私の魔術をもう一度食らいたくはないでしょう？ 引くなら今のうちよ」

正面の盗賊、後方の村人。様々な想いを秘めた視線を、全身で受けとめる私は、血の匂いが残る大地の上で、最後になるであろう賭けにでた。

さあ！ どうする？ これで引いてもらえないと、もう終わりかも。お願いだから帰ってちょうだい！

「……んふふ。うははは。あゝ、たいした度胸だ。エマお嬢様！」
「あなた！ 護衛騎士の？」

深く被った帽子の下から出てきた盗賊の顔は、どこかで見たことのあるものであった。あいつ！ 父様と一緒にいたはずの騎士じゃないの?! どうしてここに？

「おいおい、俺の名前を覚えてねーのか？ という事は、こいつらも知らねーんだろつな。まったく、自分のお気に入りにしか行動しねえからだぜ」

にやけながら場違いの愚痴をこぼす中年騎士の後ろでは、次々と盗賊と思われていた者達が顔を見せ始めていた。

「そんな！ あなた達全員、裏切ったというの？ 騎士の立場で盗賊に手を貸すなんて、何を考えているのよ！」

父様が領主に就任してから、護衛の任に着いていた五人の雇われ騎士。その者達すべてが、馬上から私を見下ろす。

「お嬢様よ。裏切りとは、人間きの悪いこと言ってくれるじゃないか。俺達は、最初から予定通りの行動をしているだけなんだぜ。まっ、アンタのおかげで、少々手間取ってはいるがな」

なっ!? 予定通り? いったいどうなっているのよ?!

「盗賊を呼び集めたのは、俺達なんだよ！ あんた達家族を、全員始末しろって依頼なんぞね。悪く思うなよ。ああと、国王様にはちゃんと伝えてやるさ。祭り好きのお嬢様は、視察先の村で盗賊の襲撃に巻き込まれ、いたぶり殺されましたっつてな!!」

思ってもみない展開に、頭が真っ白になる私は、シエノに支えら

れながら何とか立っていた。シエノにとっても驚愕の事実であろうけど、彼は私の背を優しく抱きとめてくれている。

なんとかしないと！ このままじゃ私達も、村の皆も、終わりだよ。

「い、依頼って、誰からのよ！ 私はそう簡単にやられないわよ。こ、この村だって、私が守って見せるんだから！」

そうよ！ ここまでがんばったんだから、負けるもんか！ 大丈夫、村が燃えていたのを誰かが発見していれば、警備隊へ連絡が行くはず。あと数日、なんとかがんばらないと！

「なに気張ってんだよ。強力な魔術を使って、今にも倒れそうなくせに。まあ、あんたが賊のリーダーを焼き殺しちまったおかげで、俺達が出張ってきたって訳なんだが。そろそろ、終いにさせてもらうぜ！ おいお前等、連れて来い！」

必死な私の想いを、軽く打ち破った騎士は、後方に控えていた盗賊の中から何名かを呼びつけた。盗賊達が連れてこようとしている人物は二人、全身を縄でくるまれ身動きはまったくできないようだ。

そう、私はこの時気づいた。騎士達の裏切りが引き起こした事態。護衛されていた人物の安否は？ 父様と母様は？ 他の護衛兵士達は？ 私は、まるで予想していなかったのだ。

「そんな！ 父様！ 母様！ なんて酷いことを！ この裏切り者！！」

そうよ！ 騎士が全員、敵にまわったというのなら、父様達が捕まってしまうのは予想できた事だわ！ それなのに、私は……。

「泣いてもダメだよ、お嬢ちゃん。言うまでも無いと思うが、親の拷問を目の前で見たくなかったら降伏しな。心配しなくてもあんたは生かしておいてやるぜ。依頼は果たすつもりだが、あまりにもつたいないから、な！」

猿ぐつわで声も出せない両親の姿。騎士にも負けない剣の腕を持っている父様が、無残に膝をつかせられている。その様子は、気力だけで戦っていた私を打ちのめすのに、十分な威力をもっていた。

「こんな、こんなことって。どうしたらいいの？ シエノ、私はどうしたら」

「エマ様。あなたがどのような判断をなされても、私は従うつもりです。しかし、あの者達がエマ様に触れることは我慢できませんね」

壊れそうな私は、微笑を浮かべるシエノの静かでありながら怒りのこもった返事を聞いて、我に返った。

いけない！ 私がここで屈したら、シエノはどうなるの？ ラマは？ 村の人は？

(アンタは生かしておいてやる……)

騎士の言葉には、私以外の命は保証されていない。つまり、私が両親の命乞いをしたなら、シエノ達は殺されるということになるのである。

両親の命か、シエノやラマを含めた村人の命か？

熱を帯びるシエノの手が私を支え、その笑顔が私を冷静にさせる。

シエノは、私が出すべき答えを知っているのだらう。だけど、私はその答えを言わなくても、黙って殺されるつもりなんだ。あまりに辛い答えだから……。

周囲をかこむ家屋が、すっかりと焼け落ち、淀んだ雨雲のような煙が立ち上る。教会の屋根にいる数羽の小鳥が静かに歌い、両親の呻き声が微かに聞こえる中、私は決断を下した。

「降伏は、お断り致します！ 領民を守るべき者が、領民を犠牲にして生き残ることなど、許されません！ 父様、母様、許してくださいとは言いません。私もすぐに後を追う事になると思いますので、お叱りはその時に。……さようなら」

間違っているのかもしれない。私の決断は、両親を見捨てるものであり、人として最低の所業であろう。父様と母様も、自分の娘から死の宣告を受けるなんて思ってもみなかったに違いない。

「本気で言ってるのか？ お嬢様よ。親の首が飛ぶところを、特等席で見たいってか？ なんて娘なんだよ、信じられねえぜ」

あてが外れたと言わんばかりに天を仰ぐ騎士は、よけいな手間が増えたことの苛立ちを隠さず、仲間へ命令を下した。

「仕方ねえ。最初の予定通り、男は殺して、女・子供は売り飛ばすでしょう。俺達の報酬はそれだけだからな。なるべく上玉は傷つけるなよ。価値が下がっちゃう。それと、領主は殺せ！ 依頼通りにな」

私は、人を殺したいと本気で考えた。もし、睨みつけただけで人が殺せるのなら、この場にいる騎士と盗賊どもすべてを、肉の塊にかえていただろう。

「なんの為に魔術を習ったのか？ 大事な人を守るためでは無かったのか？ こんな時、なんの役にも立たないなんて！」

「とうさま、かあさまあ！！」

私の目の前で、父様は背中から刺された。父様の胸から突き出るナイフの先は、鮮血で赤く染まり、私の心を引き裂く。

まるで夢のよう。そう、父様が地面に倒れこみ、その横で母様が首を引き裂かれる様は、とても現実には思えない。仰向けに倒れた母様の首からは、勢い良く血が噴き出し、それを顔に浴びた盗賊が、怒りながら傷口を足で押さえつけている。

「ふん。俺達を顎でこき使う領主様も、あつけないもんだ。だが、これで牢獄にいる俺達の依頼主も満足するだろうな」

「なんですって？ 牢獄？ もしかして、あんた達の依頼主は、父様が捕まえた前領主なの？」

騎士の呟きに、すぐさま私は一人の人物を思い浮かべていた。

己が納めていた領内から、不正に税を徴収し、財を成していた前の領主。父様に証拠を見つけられ、国王様へ告発されたスケベじい。

確か、反逆罪で極刑は確実。後は牢獄の中で、最後の時を待つだけと聞いていたのに。そんな奴がどうして？

「ああ、あのじいさん、よっぽど悔しかったんだろうな。いろいろ手を尽くして死刑を免れた後、俺達に依頼してきやがった」

悲しさと悔しさで涙が止まらない私を前に、勝ち誇った騎士は、饒舌に話しはじめた。

「まあ、俺達もあのジジイには弱みを握られているんでね。変なことを話される前に、逃げる必要があったんだ。と言うことで、逃げするには金がいる。金は、この村の女を闇商人へ売り飛ばして手に入

れる。ジジイは牢獄の中で、高笑いつて訳だ」

なんて愚かな！ そんな逆恨みの為に、父様や母様、村の皆を殺したというの？

私は、先程まで痙攣を繰り返していた自分の親を見つめていた。すでに、肉の塊となった両親は、何も語らず、地面の上に赤い染みを広げているだけである。

「絶対に許さない！！ あなた達全員、地獄へ送ってやる！」

躊躇なく人を殺せるのは、こんな時かもしれない。少なくとも私は、目の前にいる愚かな野獣を、なんの抵抗もなくバラバラにできるだろう。

「はは！ やってみるよ！ 踊りと魔術しか能のないお嬢様が！ あんたは俺達が飽きるまで、遊び道具として使ってやるよ。すぐに降伏しなかった罰として、正気を失うまで相手してもらっせ！」

いやらしい笑みを浮かべる中年の騎士は、これ以上話す事は無いとばかりに私との会話を打ち切り、後方で集合している仲間を呼びはじめた。

ゆつくりと動き出す盗賊達を前に、私は死を覚悟していた。もはや私は、強力な魔術を使用できず、残った力を振り絞ったとしても、倒せるのは一人か二人。

結局、私は何も出来ない。両親も、村人も犠牲になって、村は焼かれ、全滅も時間の問題。何がいけなかったのだろうか？ 今までが幸せ過ぎたのかな？ これは罰なの？

呆然と最後の時を向かえようとしていた私は、優しく耳元で語り掛けてくる男性の声に、少しだけ正気を取り戻した。

「エマ様、お気を確かに。まだ、勝負はついていません。すぐに教会へ戻って、ラマの近くにおいて下さい。良いですね」
「う、うん。分かったけど」

シエノに促された私は、後退りながら教会を目指していた。しかし、当のシエノは、私と正反対の方向へ向かおうとしている。

「シエノ！ 何をするつもりなの？ あなたも早く！」
「私はちよつとやる必要がありますから、先に行ってください」

かるい用事を済ませるかのような口調のシエノは、私に背を向けたまま、五人の騎士へ向かい合った。

貴方の為に

「騎士のクセに、大勢で村を襲撃するクズ共！ このシエノ様が、根性入れ替えてやるから勝負しな！！」

降り注ぐ朝日のなかで、金髪を輝かせながら大声を張り上げるシエノの姿は、女性のような綺麗な顔と合っておらず、騎士達の笑いを誘う。

「ぶあーっはははは！！ こりやく、言ってくれませ。男として不良品の一護衛兵士がよ！ 女みたいなお前が、騎士の俺達とまともに闘えると思ってるのか？」

「調子に乗ってんじゃねえよ！ てめえが雇われているのは、お嬢ちゃんの夜の相手としてだろうが！」

「まあいい。身のほど知らずの坊やに、騎士の腕というものを教えてやる。おい！ お前達！ その場で見ていろ！！」

次々に勝手なことを言い出す騎士たちは、とうとう動き出していた盗賊どもを止めて、馬から降りだした。

シエノは、時間を稼ぐつもりに違いない。自分を犠牲にして、警備隊が来るまでの時間を少しでも得ようとしているのだ。

「だけどシエノ、相手は騎士なのよ！ 殺されるわ！」

「シエノ！ 待って！ 私を一人にしないで！！」

急激な孤独感に襲われ全身が震え出す私は、両手で自分を抱きしめながら思いつきり叫んだ。

「父様や母様に続いて、兄代わりのシエノまでいなくなったら！」

私は、とても耐えられそうにない。気が狂いそうよ。

「エマ様。そんなに恐がる必要はありませんよ。だって私は、女神様から幸運を授かっていますからね。任せて下さい」

呑気に笑顔を見せるシエノは、自分の頬を指差した後、細身の剣を私に見せつけるよう引き抜いた。

「さあ！ 最初は誰が相手してくれるんですか？」

にこやかな笑顔を見せるシエノの言葉は、騎士達に凄まじい怒りを隆起させてしまったようである。

「この男女が！ 俺様が切り刻んでやるぜ。構えろ！」

五人の騎士がシエノを取り囲み、その中の一人が、長剣を引き抜きながらシエノの前へ踏み出してくる。

私が守る村と盗賊達の力関係を、小さく現したかのようなシエノと騎士達の闘いは、圧倒的に不利であるという現実を改めて強調しているようにしか見えない。

誰か！ 誰か助けて！ 父様や母様を失った私に、兄代わりのシエノまで失えというの？

いったいなぜ？ 私がどんな罪を犯したというのよ！

「エマ様！ あなたは教会へ入っててください。見ていてもあまり面白くありませんよ」

シエノは、私の黒髪と対称的な金髪をかきあげ、冗談を言うように私へ告げた。

「……嫌です。シエノが負けるような事になったら、私がその騎士

達を叩きのめすのですから、ここで見ています」

「あはは、それは負けるわけにいきませんね」

もうシエノったら、笑える状況じゃないのに。だけど、私は本気よ！ 残った力をぶつけてやる！

教会前の石段へ片足をかけたままシエノを見つめる私は、誰も助けに來ない状況を前に、神へ祈ることを止めてしまった。

「いい加減にしろ！！ お前達は、この場で死体になるんだよ！ そらっ！」

笑顔のシエノに、怒りを押さえきれなかった騎士は、喉を一突きにするような鋭い一撃を繰り出してきた。しかし、騎士がシエノに触れそうになった瞬間、襲い掛かってきた騎士は、私の目の前で魂を抜かれたかのように、膝から崩れ落ちていく。

え？！ なに？ 何が起こったの？ 騎士が、倒れた？！

「まずは一人。お次はどなたですか？」

一歩も動いていないシエノは、いつの間にか左手に小さなナイフを構えていた。

突然倒れこんだ騎士の首からは、赤い液体が流れ出し、シエノの持つナイフの刀身には、赤く光るものが付着している。私はこの時、勝負が一瞬にして終わっていたのだという事を直感した。

「なっ？ いつのまに斬りつけたんだ！」

「貴様！ 本当にただの護衛兵士か？！ いったい何者だ！」

瞬時に、場の空気が緊迫したものになり、次々と騎士達が剣を構えだす。

依然、囲まれたままのシエノは、両手に武器をぶら下げたまま、余裕の態度で周囲へ笑顔を振り撒いている。

「何者って、普通の護衛兵士ですよ。ただ、国から授けられた称号に舞いあがって、鍛錬を怠るような騎士には、絶対負けない自信を持っていますけどね」

最後の一言を言い終えたシエノは、なんの前触れもなく、もっとも近くにいた騎士へナイフを投げつけ、同時に反対側へ踏み出していた。

「があ！」

私の目の前では、目に刺さったナイフを抜こうと騎士がのた打ち回り、また別の一人が、両手首から真っ赤な鮮血を垂れ流しながら、もがき苦しんでいる。

なんとも信じられない！ 圧倒的有利に立っていた騎士達の中で、まともに立っているのは、もはや二人だけ。しかも、その二人は完全に腰が引けている。

私はこの状況を目にして初めて、シエノが凄まじい訓練を続けていたのだと思い知った。

「シエノ凄いい！ あつという間に三人の騎士を倒すなんて。そんなに強いつて、全然知らなかった」

「あはは。エマ様をお護りするために、領主様から手ほどきを受けていましたし、練習相手があのラマですからね。へっぽこ騎士などに負けていられませんよ」

「うん、と言うことはラマも結構強いのね。見なおしてしまうな」。

シエノの言葉に、つかの間の安息を得た私だったが、すぐにそれは間違いであることを痛感してしまう。残った二人の騎士。恐怖で顔が引きつる彼等が次にとつた行動は、後方で集まっていた盗賊達の所へ逃げ込むことであつた。

「お前等ー！！ もう、容赦するんじゃねー！ 火をかけて教会ごと燃やし尽くせ！ 中に居る奴等は、皆殺しだー！！」

盗賊達は、雇い主の敗北に動揺しつつあつたものの、逃げこんだ騎士の号令に気を取りなおし、一斉に動き出していた。

ふう、分かつていたことだけど、もう打つ手はないわね。シエノも、数十人の盗賊は相手にできないし、私も……。

「シエノ。お願いがあるの」

表情がこわばっているシエノを前に、私は覚悟のお願いを話しはじめた。

「盗賊に殺されるのは嫌なの。まして生きて捕まることはもつと嫌！ だから、シエノの手で私を、殺して！ 今すぐに！」

私は、納得のいく死に方を探していたのである。村の皆を叱咤し、生き長らえさせようとしている中で、私は諦めていたのだ。父様と母様を見殺しにした今、私が生き延びる理由は見当たらない。

「惨いことを言ってくれますね。いくらわがままお嬢様の命令でも、それだけは聞けません」

縋りつく私を振りほどいたシエノは、目前に迫りつつある盗賊の群れに向かって歩き出す。

「エマ様はラマのところへ行ってください！ 本意ではありませんが、ラマならあなたを護り抜いてくれます」

「あなたは何をするつもりなのよー！！ 私を置いて先に死ぬつもり？！ 一緒にいなさい！ 命令よ！！」

「そうよ！ 命令なんだから。シエノもラマも、これ以上大切な人が死んでいくのを見たくない！」

無駄な抵抗、という言葉がぴったりの光景。

視界一杯に広がる盗賊の群れが、馬の身体を揺らして向かってくる。私の側には、たった一人で立ち向かおうとしているシエノの姿。小柄なシエノが、さらに小さく感じ、瞬時に踏み潰されてしまうのが目に浮かぶようだ。

弓を持つ幾人かの盗賊が、矢をつがえ、他の者は剣を引き抜く。地鳴りかと思うような馬の足音が、自分の後ろからも聞こえてくるほど大きくなってきていた。

「エマ様！！ 早く中へ入りなさい！ 急いで！！」

「嫌って言ったら嫌なの！！ シエノも一緒じゃなきゃ、行かない！！」

私は走りだしていた。

死ぬのは、もうどうでもいい。だけど、大切な人を見殺しにするのは、二度とやりたくない。

離れて行くこうとするシエノまで、あと数歩。しかしその時、私は何か大きな物体に追い抜かれていたのだ。

「きゃあ！ なっ？」

巨大な物体は、風圧で私を跳ね飛ばす。虚を突かれた私は、何の

抵抗も見せることなく、砂埃の舞う空中へ吹っ飛んでしまう。

時が静かに流れていく奇妙な感覚の中、私はゆっくりと回転していた。驚愕の表情を浮かべるシエノ。剣を振りかざす盗賊達。みんな止まったように見える。ただ、自分を吹き飛ばしていった巨大な影については、盗賊の群れへ突っ込んで行く後ろ姿が、ほんの少し見えただけであった。

「ぎゃう!! う、うぐうぐ、背中が……」

いったいなんなの？ 衝撃で頭がくらくらするし、視界がぼやける。いったい何が起きているというの？

「エマ様！ 大丈夫ですか？ どこか痛むところは？」

「だ、大丈夫よ。それより、何が起こったの？」

私を抱きかかえるシエノは、無言で盗賊達の居る方向を指差す。

その先で、私の眼が捉えたもの。それは、砂埃、血飛沫、跳ね飛ぶ人の首、そして一人の男であった。

男は巨漢であり、大きな黒毛の馬に乗っていた。刈り上げられた短い白髪に魔人のような恐ろしい形相。振り回している大型の剣で、近くにいた盗賊の首を、やすやすと打ち砕いている。

あれは悪魔？ それとも私達を護るために、地上へ降りてきた戦いの神なの？ どっちにしる、私達にとっては絶好のチャンス！ 予想外の展開に慌てふためく盗賊へ、反撃の一撃を加えるのよ！

「シエノ！ あなたも、あの男に加勢するのよ！ 私は、村人とラマを呼びに行くわ」

「承知！」

今しかない！ 私達が助かるには、この瞬間に賭けるしかない！

「ラマー！ ラマー！！ 皆を連れて盗賊と戦うのよ！ みんな！ ！ 動ける男は、武器を持って外へ出なさい！ 生き延びたいのなら、外に出て盗賊を殺すのよ！」

私は、うろたえる村人へ小剣を持たせ、外へ突き出した。村のみんなからすれば、私は恐ろしい化け物に見えたのではないだろうか？ なんとと言っても、死ぬかもしれない戦場へ、素人の村人を叩き出しているのだから……。

「お嬢様！ どうした?!」

「ああ、ラマ。急いで外に向かつてちょうだい！ 今、盗賊は混乱しているわ。この隙に皆で戦えば勝てる！ 絶対よ!!」

最初こそ不信な顔をしたラマだったが、一目、外の乱戦を目にしたからは、周囲の男性を引き連れて外へ向かいます。

「お嬢様。一人で大丈夫か？」

「なに言ってるのよ！ 変な気を使わずに早く行きなさい！」

しばらくの後、教会の中は外の死闘とは無縁の静かな空気に包まれていた。動ける男達はすべて外へ出て、中に残っているのは、女子供とケガで動けない男性のみ。私の耳には、すすり泣きと呻き声だけが響いていた。

幼い黒天使

ラマつたら、慣れない事しちゃって。私だって、まだ一回ぐらいは魔術を使えるんだから！ 私の方が、あなた達を助けてあげるわよ。

「よーし！ 私も行くぞ！」

少々落ち着きを取り戻してきたことで、シエノとラマが心配になつてきた私は、教会の正面扉へ向かった。

「えっと、どこに？ え？」

扉に手をかけた瞬間、背後で息を呑む気配が湧きあがる。同時に、激しい呼吸音と空を切り裂くかすれた音が、私に危険を知らせてくれたのだがもう間に合わない。

「ぎゃ！？」

いつ、痛いー！ なにか右腕に刺さった！ なんて痛みなのよ！
気を失いそう。

「見つけたぜ、お嬢さん。アンタだけは殺しておかねえと、俺の気がすまねえ。悪いがズタズタにしてやるぜ！」

こ、このお！ 窓から入ってきて、後ろから弓で狙うなんて、騎士の風上にも置けない奴！ だけど、どうしよう？ いまこの場には、戦えない人ばかりだ。

「おい！ エマお嬢！ 殺す前に聞きたい事がある。あの大男は何者なんだ？ あいつのおかげで、集めまくったゴロツキどもは逃げだしやがった！ 言え！ 誰だ！」

「知らないわよ！！ 第一、父様達を殺したお前なんかには喋ることなんか無いわ！ それと、私の名を気安く呼ぶなー！」

力を振り絞って声を張り上げる私は、右腕を刺し貫いた矢の激痛に耐えて中年騎士へ向かい合う。

くう！ このままでは魔術の使用どころか、相手に向かっていくことさえできない。シエノとラマは外で無事かどうかも判らないし、助けは期待できないわね。

「こうなったら、やってやる！ 左腕だけでも魔術を使ってみせようじゃないの！」

覚悟を決めた私は、歯を食いしばって立ちあがり、一度もやったことの無い片腕での魔術を行使しはじめた。

怯えてその場を動かない村人には、なにも言えない。だって、彼等を護るのは私の役目。私が護ってもらおうというのは、お門違いなんだから。

「お嬢。無駄なことはやめときな。この間合いだったら、魔術より先に、俺様の剣がアンタの頭を落とすぜ」

「うるさい！ どうせ殺されるのなら同じよ！ さあ、いくわよ！ さ迷う目的無き魔の力よ！ 我が意思により束ねられ、いかずちの蛇となれ！！」

くう、やっぱり片腕では魔力が思うように集まらない。この程度では、術の発動すら難しいわ。

「ふん！ 死に急ぎやがって」

素早く一步を踏み出した騎士は、私を見下しながら白銀にきらめく剣先を降り下ろす。躊躇の無い一撃は、確実な死を約束するかのごとく私の肩を指していた。

これでお終いなんで、なんだか冴えないな。だけど、なんとか村を護れそうだし、良かったと言うべきかな？ シエノとラマには悪いけど、先に逝かせてもらおうよ。

プシャアアアー！！！！

顔に飛び散る生温かい液体。恐怖で目を閉じていた私にも、それが血液であるという事は、鼻をつく匂いからも良く分かっていただけ。私は、右腕の痛み以外にも感じていない。

私は死んだのだろうか？
神のいない教会に、静かな時が流れる。

いまだに魔術の集中を解いていない私は、恐る恐る目を開け、教会内に広がる信じがたい光景を目の当たりにしていた。

「う、うがぁー！！ ちくしょー！ 俺様の手が！！ このガキ！
殺してやる！」

全身血まみれで、両膝をつく騎士。床に転がっている人間の両手。切り取られたかと思われるその手も私を驚かせたが、最も自分の目を疑ったのは、一人の少年が私と騎士の間に立っていたことであつた。

「どうして子供が？ ええっと、それより私は助かったの？」

「ん？ お姉さん大丈夫、だよな？ 斬られる寸前のところを助けてやったんだから、血飛沫までは文句言うなよ」

生意気な話し方をする少年の言葉は、さらに私を驚かせる。もしかして、騎士の手を斬り落としたのはこの少年なの？ いたい誰？ 黒髪に黒目、おまけに黒い肌の少年なんて、この村どころか今まででも見たこと無い。

「あ、あなたいつたい？」

「ちよつと待った。先にこいつを始末するよ。お姉さんは、そのままじつとしていな」

両手を斬り落とされながらも怒りをあらわにする騎士に対し、少年は無表情のまま、肩に乗せていた短めの剣を高く振り上げていた。ちよつと冗談じゃないわ！

「待ちなさいよ！！ そいつは親の仇なんだから、殺す権利は私のものよ！ 坊やは引つ込んでなさい！！」

「坊や？ 助けたのは俺なのに……」

「があー！！ 貴様らー！ 一人で死んでたまるか！」

一人？ ふざけんじゃないわよ！ あんた達のおかげで何人が犠牲になっていると思っているのよ！！

「はあつ！ 天空に住まう、いかずちの蛇よ！ 我が魔力によって生まれ、意思によって放たれよ。黄金に輝きし魔力の蛇は、電撃の牙を持って彼の敵を食らわん」

普段より長い詠誦を必要とした魔術であったが、なんとか完成させる事が出来た。

私の左手には、術により発生した金色の蛇が頭をもたげ、大気を弾きながら出番を待っている。

これで最後！ 死人が野ざらしになっている地獄のような祭も、これで終幕よ！

「父様と母様、そして村民の仇！！ 焼かれて死ね！！！」

突き出した私の手からは放射状に稲妻が走り、膝を突いたままの騎士へ四方八方から襲いかかる。

「ぐぎやああああ！！！」

「おわっ！ これが魔術か？ 凄い」

黒い少年の前で無数の蛇に噛みつかれた騎士は、口や目から体液を吐き出しながら倒れていく。床に転がった騎士の身体からは煙がたちのぼり、肉の焼ける嫌な臭いが教会中を支配した。

「おお！ お姉さん、やるもんだね〜。……ん？ どうしたの？

お姉さん」

「はあはあ、ううう。もう、限界だわ。頭が」

昨日から開催されていた収穫祭の疲労。ほとんど寝ていない昨晩。限界を超えて使用した魔力操術。それらすべてがこの時、私の意識を砕き、腕に矢が刺さったままの身体を教会の床へ叩きつけたのであった。

ああ……、私はここまでだ。全身に力が入らない上に、ひどく頭が痛い。目の前が暗くなってきた、私に走り寄ってくる少年の顔も見えない。結局、この子は何者だったのだろうか？ シエノとラマは無事なのかなあ〜。

私は、戦いの終わりを見届けることなく、意識を失った。

私が魔術に成功したのは十一歳の時。その日、父様と母様は外出しており、屋敷にはお手伝いの人を除くとシエノとラマしかいなかった。

(ねえねえ、シエノ！ 私、魔術に成功したよ。ちよつとだけど光が出たの！ 待ってて、今見せてあげるから)

(いけませんよ、エマ様。奥方様から、自分一人だけで使つてはいけないと言われているでしょう?)

上機嫌だった私は、密かに練習していた成果を早く誰かに見せて仕方がなく、期待外れのシエノの小言に頬を膨らませる。

(いいよ！だ！ シエノには見せてあげない。ラマー！ 良いものを見せてあげる)

(ん？ なんだ、お嬢様。また、変なイタズラでも考え出したのか?)

窓際でウトウトしていたラマは、あくびをしながら私を見ている。どうやらラマは、私が魔術に成功したことを疑っているみたい。

(ぶ！ 二人とも見たくないの？ 父様や母様より、先に見せてあげようと思ったのに！)

せつかくの好意を喜ばない二人に対しだんだん機嫌が悪くなる私は、無理やりにも見せてやろうと、その場で魔術の詠誦をはじめた。

(いいから見てよ！ ええつと、さ迷う目的無き魔の力よ。我が意思により束ねられ、小さき星を織り成せ。魔力は光の糸となり、闇

落ちたる我が瞳に、明星を灯す)

母様から教えられた光の魔術。私は自分の持てる力を振り絞って、自分の指先へ輝く小さな星を創り出そうとした。

(あ、あれ？ うっ、痛！ 頭が痛いよ！ なんなのー?! すごく痛いー!)

(エマ様！ どうしたのですか？ 頭がどうかしたのですか？ ラマ！ 医者を!)

(分かった！ お嬢様、少し我慢しろよ)

魔術の行使と同時に襲いかかってきた頭痛。あまりに突然で、あまりに酷いその痛みは、お嬢様育ちの私を気が遠くなるほど打ちのめす。

(シエノー、ラマー、痛いよ！ もう、ダメー!)

「お姉さん！ しっかり！ ここはもう安全だって」

え?!

何？ ここは？ 私、いま寝ていたの？ さっきのは夢？

私の目には、どこかで見たことのある天井と、見覚えのない黒い少年が映っていた。

「ここは教会？ あなたは、誰？」

「俺？ 俺はビーン。ここは教会の休憩室さ。言っておくけど、俺は師匠が助けに行くって言うから、しょうがなく付いて来ただけなんだぜ」

師匠？ 誰のことかしら？ それに助けに行くって……。

「そうだ！！ シエノとラマは？ ねえ、君。村はどうなったの？」
ベッドから起き上がった私は、少年に食らいつくかのような勢いで現状を尋ねた。

「ちよつと待った。そんなに焦らなくても盗賊なら全員いないよ。死んだか逃げたかは知らないけど。それと、変な兄ちゃん達ならそこにいるよ」

少年が指差す先には、割られずに残った数少ない窓があり、かすかに開いている隙間からは人の目が見えている。そう、まるで誰かが覗いているかのように。

「おっと、見つかったな。行かせ、シエノ」

「は、どうして普通に見守る事ができないのかな？」

休憩室の外から聞こえてくる声と足音。昔から良く知っているその音は、私に安心感と幸福感を運び、危機が去ったことを教えてくれた。

「よう！ お嬢様。気分はどうだい？」

「エマ様、身体の具合はいかがですか？ 丸一日寝たままでしたから心配しましたよ」

姿を見せた幼馴染の二人は双方とも傷だらけ。だけど表情は明るく、私のことばかり聞いてくる。

まったく、人のことより自分の身体を心配しなさいよね。

「シエノ、ラマ。無事で良かったわ。それと、ありがとう。村の為に命を賭けてくれて、感謝しているわ」

私は、二人に初めて感謝の言葉を伝えた。今までにも多くの手助けを得ていた私ではあったけど、照れくさくてまともにお礼を言うことはなかった。だけど今回は、最後まで自分を支え、力を貸してくれた兄代わりの二人に、どれほど礼を述べても足りないと思っている。

本当に、力を貸してくれて、ありがとう。二人のお兄様。

涙幕

「おっと、エマちゃんが感謝するなんて珍しいな。まあ、お漏らしした下着を洗わされたんだから、それぐらい当然だよな」

「バカ！ ラマ、そんなこと言わなくても」

「え？ な、なにそれー？」

嘘、嘘！ そんなー！！ うわ！ 私の下着も服も、予備に持ってきたやつだ。ということは、誰が私を着替えさせたのー？

顔を真っ赤にしてパニックになる私は、先ほどまで持っていた感謝の気持ちを、どこか遠くへ追いやってしまおう。

「もー！！ このバカラマ！ 黙っているのが礼儀じゃないの？

恐かったんだから、漏らしても仕方ないでしょう！ それに、私が寝込んでいるのを良いことに、裸も見たんでしょう？ 許さないわよ！ー！！」

ベッドから飛び降りた私は、目を丸くしている少年の前で、ラマへ殴りかかっていた。

「エマ様！ 腕の傷が開きますよ。安静にしてください！ エマ様の着替えは、村の女性に頼みましたから、私達は見てませんでばー！」

むう、本当かな？ いまいち信用できないな。けど、しようがないか。腕の傷も痛むし、頭もちよつとズキズキするもんなあ。シエノに羽交い締めにされた私は、ラマに一撃を食らわせる事もなく、ベッドへ戻されてしまった。

「分かったわよ。シエノも後で覚えてらっしゃい」
「そんな〜」

もう、よけいな体力を使ったせいで頭痛がするわ。これから村を見て周ろうと思っっているのに。

「そっだ！ シエノ、あの大男は何者だったの？ まだ、居てくれているの？」

「あゝ、その人でしたら……」

「それって俺の師匠の事？ だったら、まだ村のどこかに居る筈だぜ。村をある程度再建するまで、付き合っつて言っていたからな〜」

幼馴染とのドタバタ騒ぎを静かに見物していた少年は、私の疑問に素早く飛びこんできた。

「会いたいのなら、連れて行ってあげるけど。どうする？」

生意気な子、って言いたいところだけど。うゝん、良く見てみると結構かわいいわね。髪から眼、肌、着ている物に至るまで真っ黒だけど、この子には似合っているわ。シエノとは、また違った良い男ね。

「あなた、ビーンって言っていたわよね。私はエマ。こっちの二人は、変態お兄ちゃんだから近づかないようにね。それじゃ、一緒に行きましょう。その師匠を紹介してちょうだい」

「誰が変態だよ」

「酷いですよ、エマ様〜」

うるさい、うるさい！ こんな奴等は無視して、さっさと行くぞ

！

「それじゃ、エマさん行くよ」

なんだか嬉しそうなブーン少年に先導されて、私達は休憩室を後にした。頭痛が少し気になっていた私だけど、これ以上寝込んでなにかいられない。村の様子を知ることのほうが最優先よね。

教会の中は、台風が通っていったかのような有り様。椅子や窓は粉々に碎け、血痕がそこら中に広がっている。盗賊達や村人の遺体は運び出されているものの、その場で何があつたかは一目瞭然の状態と言えた。

「ごめんなさい、みんな。盗賊が狙っていたのは、私達家族の命。こんな時、少ない護衛で収穫祭に参加さえしなければ、みんなは無事だったのに。」

「どうしたの？ エマさん。これくらいの戦闘跡なんか、べつに對したことはないと思うけどな」

「これくらいって、何を言うの?! 人がたくさん死んだのよ!死ぬはずじゃなかった優しい人達なのに、私の両親だって」

思わず声が大きくなってしまった私だけど、すぐに後悔した。少年が声をかけてくれたのは、私に元気を出させる為であり、心配してくれたから……。

「い、ごめん。あなたは、私の命を救ってくれたのに、ごめんなさい」

「べ、別に、目の前にいたから助けただけだよ。師匠が走り込まなかつたら、俺だって来なかつたわけだし」

なんか、照れているのかしら? ちょっとかわいいわね。

私から顔をそらす少年は、足早に教会を出てしまった。

教会の正面扉を抜けると、頂点にさしかかる太陽の下、見知らぬ人が大勢見える。集まっている人達は、一人の大男を中心に忙しく動きまわり、焼け落ちた家屋の修復に動いているようだ。

「あれが師匠さ。周りにいるのは隣村の人で、助けに来てくれたみたいだよ」

「そうなの？　こんなに早く来てくれるなんて、助かるわ」

そう言えば、祭りに参加していた人の中に、隣村の人がいたような、いないような。その人が呼びに行ってくれたのかな？　まあ、なんにしろ、ありがたいわ。

「それじゃ、シエノとラマ。それにビーン君は、休んでいてちょうだい。後は、一人であの人と話をしてくるわ」

「あつと、師匠は恐そうに見られるけど、根は優しい人だから勘違いしないでやってよ」

「分かったわ！　ビーン君も、良い子よね」

私の軽いウインクに、真っ赤な顔で答えるビーン君。うん、新鮮な反応だな。こんな可愛い子の師匠なんだから、外見ほど恐ろしい人でもないでしょう。

私は、不安そうな表情の幼馴染へ笑顔を送りながら、大男のもとへ歩み進んだ。

一通りの指示を出し終わったと思われる男は、私が近づいていくのを黙って待っていてくれる。まあ、確かに悪い人ではないよね。

「お初にお目にかかります。私はエマ。危ないところを助けていただき、村を代表して、お礼を申し上げます。宜しかったら、お名前をお教え下さいませんか？」

膝を折り、最大の礼を持って話しかける私に対し、男は少し笑ったように見えた。

「ふん。顔色も良くない上に、腕の傷が痛々しいな。辛いのなら、村の代表なんて背負わずに寝ていたらどうだ？」

な？ 何よ、この人！ 私が精一杯、礼儀正しく名前を聞いたって言うのにー！

「あ、あんたねー！！ 人が名前を尋ねているのに、質問を返すのは失礼でしょう！ 第一、私は領主の娘なんだから、村を代表するのは当たり前じゃない！」

ふんっだ！ 丁寧にしていた自分がバカみたいじゃない！

すっかり地が出てしまった私は、先程聞いたビーン君の言葉も忘れて、大男と睨み合ってしまった。

「ぶはははは！！ そっちの方が似合っているぞ。ああつと、私の名はゼノスだ。冒険者として各地を歩き回っている。よろしくな」

私に歩み寄って左手を差し出す男は、勝手なことを言いながら自己紹介をはじめた。

目に映るものは、鍛え上げられた筋肉の芸術。私の右腕を気遣う、洗礼された無駄のない動き。白髪かと思っていた髪は、強い日差しの下、白銀の輝きを現していた。

ふん。わりと良い男だけど、凄い身体をしているわね。いったい身長はどれぐらいなのかな？ ラマでも大きいと思っていたけど、まるで大人と子供だわ。

「どーもよろしく！ それでゼノスさん、村の様子はどうかしら？」

隣村から助けに来てくれた人達がいるって聞きましたけど」「ああ、それならちよつと向こうで話そう。さあ、行こうか」

私とゼノスさんのやり取りは、それなりに注目を集めている。ゼノスさんが場所を変えようと言ったのも、もつともな事であると理解はしたが、移動した場所の異様さには驚かされた。

「ここはお墓、ですか？」

「そうだ。今回の犠牲者はすべてここへ埋めた。もちろん、君の両親もここにいる」

私の目の前には、掘り返された地面と、盛り重ねられた土の小山がいくつも並んでいる。

中でも、一際高く盛られた二つの土山には、見た事のある豪華な剣と鞘が突き立てられ、思い出したくない事実を強烈に示していた。父様、母様。すべて終わりましたよ。私は、残念ですけどそちらへは行けませんでした。どうか、許してくださいね。

墓の前に膝をつく私は、静かに祈りをささげていた。

「こんな時になんだが、一応言っておく。ここには盗賊達も一緒に埋めてあるが、気を悪くしないでくれよ」

「なんですつて?! あんな奴等を、犠牲になった村人と同じように埋葬したのですか? そんな、どうして? 野ざらしになって当然の罪人達なのに!」

ゼノスの一言に対し、私はすぐさま反論する。

だってそうでしょ? 村を護る為に死んでいった人達が、村を襲ってきた奴等と同じような扱いをされるなんて。私は許さないわ!

「気持ちは解らなくもないが、野ざらしは止めた方が良い」

「気持ちですって？ いきなり襲いかかられて、両親を殺されて、村ごと焼かれそうになった私達の気持ちが解るって言うの？ 盗賊どもには、埋葬される資格なんか無いわ！」

軽く百を超える墓を前にして、私は怒りを抑えきれなかった。なんとしても盗賊達へは罰を与えたい。そんな気持ちが先走り、まったく周りが見えていなかったのである。

「過激な発言だが、少し私の話を聞いてもらおうかな」

なんなのよ?! 私の言うことに文句でもあるって言うの！

「君は、野ざらしにされた死体を見たことが無いね？ もし、その凄まじさを知っていたら、とても言葉には出来まい。野に晒された死体は、ほどなく腐りはじめる。腐った死体は見た目もそうだが、臭いも凄い。さらに問題なのは、疫病の原因に成りえるということなんだよ。だから、相手がなんであろうと埋める必要があるんだ」

私は吐きそうになると同時に、自分のことしか考えていない愚かさを痛感していた。

ああ、なんとという……。命の恩人に向かって、私はなんて失礼なことを言ってしまったのだろう。自分の無能さが身に染みる。私はベッドで寝ていただけなのに、本当に最低な人間だわ。

「申しわけ、ありません。世間知らずのクセに、何も知らないクセに、私はなんて愚かなのでしょうか。命を救われ、村の今後まで気にかけていただいたというのに」

遠くから板を打ち付ける音が聞こえる。威勢の良い掛け声の中には、子供達も雑じっているらしく、村全体が再建へ動き出している

のを感じた。しかし、私はその場に取り残されたかのように、頭を切り替えることが出来ていない。いや、村人達も大切な人を失った怒りは消えていないのであるが、必死に次の一步を踏み出そうとしているのであろう。それなのに。

「ふむ。本当に、聞いていた通りの女性だな。別に、落ち込む必要もないだろう。誰でも初めての戦場では、上手くいかないものさ。知らないことも多い。それを考えたら君は今回、上出来だ。良くやったよ」

良くやった？ 私が？ 多くの村人を死なせた私が？ なぜ？

「そんな悲しそうな目で見られても困るんだが。え、村の人が言っていたが、君には逃げてもらいたかったのだとさ。たとえ村が全滅することになっても、かまわなかったらしい。だが君の凄い気迫の前に、誰も言い出せなかったそうだ」

え？！ どう言う事？ 私が逃げて、良かったって？

「君と護衛の者が、必死に言い争っているのを聞いて、村人は命を賭けて戦うことを覚悟したと言っていた。なかなかの人望だと言いたいところだが、少し無理をし過ぎていたんじゃないのかな？ 多少の弱みは、見せても良いと思うぞ。強気な態度ばかりでは、可愛くないしな」

この人は、私を慰めてくれているのかしら？ なんだか不思議ね。今まで、私と対等に話してくれるのは、肉親かシエノ達だけ。しかし、それでも親子としてや領主の娘としてで、本当の対等ではなかった。

ゼノスさんは、まったくの他人。出会ったばかりで、職種もまる

で無関係。それなのに、私にはゼノスさんの大きさがわかる。身体
の大きさではなく、心の大きさというものが。

「そ、それではゼノスさん、ちよつと弱みを見せても良いですか？
ほんのちよつと、少しだけ、胸を貸して下さい」

私は、自分の立場を理解してから涙を見せないように生きてきた。
それでも我慢できないときは幾度もあったが、自分から思いつきり
泣きたいと思つたのは、この時が初めてではなかっただろうか。

私はゼノスさんの胸で、声を上げて泣いた。

涙の理由はよく分らない。両親の死か？ 親しい村人の死か？
無知で無力な自分のためなのか？ さっぱり分らない。

そして、強く

遠くで鳴っていた釘打ちの音は、いつの間にか止んでいた。

頭の上では太陽が元気に陽光を放ち、地上では多くの影が少しばかりの成長を見せている。

当の私かというと、眼を赤くしながら、未だにゼノスさんの大きな胸を借りていた。

「エマ殿。落ち着いてきたなら、そろそろ戻ったほうが良いのではないかな？ 君はもう少し安静にしている必要があるだろう。魔術を限界以上まで行使したツケは、思ったより身体を痛めているはずだ」

「でもゼノスさん。私は、皆を元気付けなくては……」

ゼノスさんの言葉は、とても優しく嬉しいものであった。ただ父様が居ない今、皆を率いるのは、この私。夫や恋人を失った女達を慰め、子供達に勇気を与えなくてはいけない。

ゼノスさんの胸に寄りかかりながら、弱い自分を見せてしまった私は、恥ずかしさに顔を赤らめながら立ちあがった。

「いつまでも甘えてはられません。辛いのは皆同じですから」

「その強情な性格は直りそうにない、かな？ では仕方ない。私も少しばかり手助けさせていただこう。力仕事なら任せてくれ」

私の三倍は太い腕を見せるゼノスさんは、軽く微笑みながら村の中央へ向かいはじめた。

彼の言葉からは、見返りを期待するような素振りが微塵も感じ取れない。命を賭けて盗賊達の中へ切り込んできたことも、私が目覚めるまで村の再建に従事してくれたことも、まったく口に出そうと

しない。いったい何者なんだろう？ 普通なら報酬を要求して当然なのに。

「あ、あの、ゼノスさん。どうして私達を」

「ん？ ちょっと待ってくれ。おい！ そこにいる奴等も手伝ってもらうぞ。さっさと出て来い」

私に背を向けながら、近くの家屋に声をかけるゼノスさん。最初は何をしているのかと思っただが、どうやら物陰に誰かが隠れていたようだ。

「ありやりや、ばれちまったぞ。まったく、この坊主が大人しくしていないからだぜ」

「ラマ、人の所為にするのは良くない。ましてや、相手は子供なんだよ」

「俺を子供扱いするなー！」

は、何してんのよ。こいつ等は！ ビーン君まで混じって、もう！ 変な性格がうつってしまっわ。けど、ちょっと待ってよ。さつきから覗いていたってことは。

「あ、あんだ達！ 私が泣くのを覗いていたわねー！ この、覗き魔変態野郎！ ぶっ倒してやるー！」

人の着替えは覗くし、泣き顔は覗くし、本当に信じられない奴等だわ！ ビーン君も一緒になって、悪い子なんだから！

私の性格をよく知っている二人は、とても素早くその場から逃げ出したが、残った少年は違っていた。まさか、私が突進してくるとは思っていなかったのだろう。

「捕まえた！ こゝら、ビーン君。私が泣いているところを見たわね！ とつても恥ずかしいんだから、罰を受けなさい。うふ」
「え？ え？ うひゃ！ うひー！！ あは、あはははは！！！！
くすぐりたいよー、お姉さん！ ちよつと、やめてー！」

なんか虐めがいのある子ね。弟が出来たみたいで、嬉しくつてしょうがないわ。

「こりゃ、しばらく離しそうにないな。どうするよ、シエノ」
「そうだね。ここはビーン君にまかせて、ゼノス殿と一緒に、村人の手伝いにいこう」
「まっ、そうだな」

呆れ顔の二人は、楽しそうに見物していたゼノスさんを促して、その場を去ってしまった。なんか他人ごとみたいに言っていたけど、後で覚えていなさいよ！ お仕置きは終わっていないんだからね！
日差しが和らぎつつある空の下、無抵抗のビーン君を抑えつけている私は、今回の惨劇を振り払うかのように、笑いながら少年を虐めまくるのであった。

今回の盗賊団襲撃事件は、ほどなく警備隊へ伝わり、多くの兵隊が村へ押し寄せることになった。もちろん、事件の張本人についても、国によって資格を得ていた騎士達が、リーダー的立場にいたことも世間に知られた。

村の再建は、国の援助により飛躍的に進んでいる。もっとも、死亡した住人に関してはどうにもならないので、隣村と合併する話も出ているらしい。

私は、領主の後任騒ぎに巻き込まれてしまった。まだ、村の中で

家を立て直しているというのに、父様の部下だった副領主がやって来て大変迷惑。もう、私は領主候補なんかの名乗り出ないって言っているのに！

結局、副領主がそのまま領主代理として、しばらく公務を代行する事となった。うんうん、それが一番よね。けどな、私はこれからどうしようかな？

「エマ殿。そろそろ私は旅に出ようと思う。短い間だったが、共に働くことが出来て楽しかったよ」

私が父様と母様の荷物を馬車へ積み込んでいた時、馬に乗って現われたゼノスさんは、短い別れの挨拶を言いに来た。

「旅？ ちょっと待ってください、ゼノスさん。私は、屋敷まで一緒に来てくれると思っていたのですが。まだ、今回のお礼もしていませんし」

はつきり言つて、驚いたという以外のなにものでもない。一緒に働いて、食事をして、楽しく踊り騒いでいた私は、別れについて何も考えていなかったのだ。

「礼は君の踊りで十分だよ。私は各地を旅してきたが、あれほどの踊りを見せてもらったのは初めてだ。お返しに何かをさせて欲しいぐらい、君の舞いは素晴らしい」

真顔で誉められる私は、顔が真っ赤になってしまふ。この人って、結構女性の扱いに手馴れているのかな？ そうよね、長く旅をしているって言うから、手慣れもするわよね。私ったら、なにをドキド

キしているのかしら？

「では、先に失礼させてもらう。縁があれば、またな」
「え？ そんな！」

ゼノスさんは、あっさりと踵を返して村の外へ馬を走らせてしまった。

どうしてなの？ 私が何か気に触ることでもしたの？ こんなにいきなり別れる事になるなんて。

村の中で唯一弱音を聞いてもらえる人物だった彼が、簡単な挨拶だけで出ていったことは、私の信頼を怒りへと変えるのに十分なものであった。

「なんでよ！ 冒険者って皆こうなの？ 私は信頼していたのにー！」

ふん！ どうせ私は、旅先で偶然出会っただけの女ってこと？

なんか許せな、あれ？ あれは……。

「お姉さん！ さよーならー！！ 元気でー！！」

私の目には、慌てて馬を走らせるビーンの姿が映っていた。

ビーンたら、何やっているのよ。自分の師匠に置いて行かれそうになっているなんて。困った子ね。

「さよならー！！ あなたもしっかりねー！！」

慌ただしく馬を駆ける親子のような冒険者達は、私と多くの村人を救って、何も受け取らずに出ていった。時には警備隊から疑いの目で見られ、時には村の子供達に怖がられ、それでも村の為に残っ

てくれた優しき人。私はあの人達が英雄であると信じてやまない。私が初めて出会った英雄。本や歌の中に出てくる小綺麗な人物ではなく、荒々しい豪胆な大男。外見ではなく、心の美しさで人を引きつける国を持たない王。

別れ方には納得いかないけれど、私の踊りを誉めてくれたから、良しとしようかな？ なにはともあれ、私の人生を大きく変えた戦いは、幕を閉じたのであった。

「はあ、こんな感じで良いのかな？ 一人で旅に出るのは初めてだし、ちょっと不安だな」

屋敷に戻った私は、すべてを処分した。屋敷はもちろん、使用人にも別の働き口を紹介し、父様と母様が残してくれた財産のほぼすべてを、金貨や宝石に姿を変えさせていた。

私だけでは、大きな屋敷を維持していくことは無理な話。以前からあった結婚話は、完全に破談となり、私は一人取り残されてしまったのである。

「皆、元気かな？ まったく、私のことばかり心配して、残るって言い出すし」

先日行われたお別れの食事は、全員が泣いてばかりだった。なんとか説得して、別のお屋敷へ行ってもらったけど、私もそんな事は望んでいない。特に、シエノとラマが出て行くのを見た時は、涙を抑えるのが大変だった。

「あの二人。今頃なにしているのかなあ」

思い出すと泣きそうだから止めておこーと。これから私は旅に出るのだから。そう、私は冒険者になる。生き抜く力を身につけて、もっと強くなるんだ。私には、失って恐いものなんて何も無い。ただもう一度、あの人には会いたいな〜って、思っているけどね。

「さて、荷物も用意できたし、出発といきますか！」

物音一つしない屋敷の中で声を上げる私は、落ち込みそうな気分を無理やり上昇させていた。そうでもしなければ、悲しさのあまり歩けなくなってしまう。今はもう、住み慣れた屋敷から一刻も早く出て行かなければ！ 後ろ髪を引かれる私は、なるべく懐かしい屋敷の中を見ないようにして、玄関を走り出した。

「やーっと来たか、お嬢ちゃん。遅過ぎるぞ」

「お待ちしていました、エマ様。これからは当分の間、お供させて頂きます。それから、何度も言わせていただきますが、私達には誤魔化しなんか効きませんよ」

「そうそう、一緒に旅に出て欲しいなら、はっきり言えば良いんだよ」

絶対泣かないと決めていたけど、やっぱり無理みたい。

私は、その場で思いつき泣き喚いた。私を待っていた二人の幼馴染が、ビックリして困るぐらいの大声で……。

「ひっぐ、ひっぐ、なによ〜。あっさり出て行ったクセに〜。わたしは、ひとりでがんばるんだから〜」

「はいはい、文句は後で聞いてやるって」

「それでは、まずどこに向かいますか？ 人が多く集まる街へ行くべきでしょうね。その方が、仕事を見つけるのも楽でしょう」

二人ともまったく人の話を聞いてないし、うう、どうしてやろうかしら？

涙目で睨む私をよそに、二人のお兄ちゃん達はさっさと話を進めていく。どこに行くのだの、今夜は何を食べるのだの、私にはなにも出ないだろうと言わんばかりの態度だ。

「ラマ！ シエノ！ リーダーは、私よ！ 私が何でも決めるのよ！ 分かった？！」

「そうよ！ 私が自分でやるって決めたのだから、リーダーは私なのよー！」

「ほーい。分かったよ」

「それではリーダー、行きましようか？」

あれ？ なんかあっさり認めたな。変なの？ まっ、良いけど。

「よし！ それじゃー、出発だー！！！」

片腕を突き上げる私。笑顔のままのシエノ。なんか呆れ顔のラマ。この日、命を賭けた収穫祭の幕を完全に下ろし終える事が出来た私達は、同時に冒険という新たなお祭りへも参加するべく、その記念すべき第一歩を踏み出したのであった。

（そう言えば私、二人にはっきりとした返事をしてないや。私のことを愛しているって言うてくれたシエノとラマ。結婚話が消えてしまった今、どうしたらいいのかな？ 二人とも気にしてない様子だけど、このままいつも通りの関係でやっていけないかな？ うーん、私ってこの手の話しは、どうも苦手なんだよね。二人には悪いけど、

女は強く、世を渡る

返事はまた今度の機会と言いつつことで、許してね。優しいお兄さん達)

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2307a/>

女は強く、世を渡る

2008年11月7日07時20分発行